

茨城県友部町

# 善九郎古墳群

「宍戸ヒルズカントリークラブ道路工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

株式会社宍戸国際ゴルフ倶楽部  
大成エンジニアリング株式会社

茨城県友部町

# 善九郎古墳群

「宍戸ヒルズカントリークラブ道路工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

株式会社宍戸国際ゴルフ倶楽部  
大成エンジニアリング株式会社



1. 調査区全景（南側より）



2. 出土土器一括

## 例 言

1. 本書は、茨城県西茨城郡友部町南小泉1535番地2に所在する、善九郎古墳群の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、「宍戸ヒルズカントリークラブアプローチ道路造成事業」に伴う埋蔵文化財の本調査として実施したものである。調査に先立って、友部町教育委員会による試掘調査（調査担当 萩原義照氏）が行われており、その成果を基に行った。
3. 本調査の発掘調査から報告書作成に至る費用は、施行者である(株)宍戸国際ゴルフ倶楽部が負担した。
4. 本調査は、善九郎古墳群発掘調査会の指導のもと、伊藤俊治を調査担当として大成エンジニアリング株式会社が実施した。
5. 調査期間は下記の通りである。  
発掘調査 平成16年2月17日～16年2月25日  
整理調査 平成16年2月26日～16年5月31日
6. 本書の編集は、大成エンジニアリング株式会社 小野真美が担当し、山崎裕子が補佐した。また執筆文責を文末に記した。
7. 出土遺物などの諸資料は、友部町教育委員会が保管し活用を図る。
8. 発掘調査および整理作業にあたり、次の方々・諸機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。(敬称略)  
池田見一 川井正一 萩原義照 茨城県教育庁 株式会社阿部建設  
株式会社キガ
9. 発掘調査・整理作業参加者は次の通りである。  
(発掘調査)  
関 淑子 関 皓安 海老沢 千代子 小島 百合子 川井 ゆり子 谷津 清子  
上野 栄  
(整理作業)  
小野 真美 萩原 明美 山崎 裕子 佐藤 友子 海老原 佐緒里 二瓶 稔  
松本 桂三 中野 泰三



# 目次

巻頭図版

目次／挿図目次／表目次／図版目次

凡例

## I 調査概要

- |               |   |
|---------------|---|
| 1 地理的位置と歴史的環境 | 1 |
| 2 調査に至る経過     | 4 |
| 3 調査方法        | 5 |
| 4 基本留序        | 6 |

## II 検出された遺構と遺物

- |              |    |
|--------------|----|
| 1 縄文時代の遺構・遺物 | 7  |
| (1) 堅穴住居跡・土坑 | 7  |
| (2) 縄文土器・石器  | 14 |
| 2 古墳時代の遺構・遺物 | 32 |
| (1) 古墳・土器    | 32 |

## III 考察

- |                        |    |
|------------------------|----|
| 1 縄文中期の集落について          | 38 |
| 遺跡について/「二段掘込みの住居跡」について |    |
| 住居跡と袋状土坑の関係/集落の復元に向けて  |    |
| 2 古墳群について              | 46 |
| 古墳の規模と墳型/古墳の時期と性格について  |    |

報告書抄録

# 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図 (1/50,000) .....	2
第2図	調査地点位置図 (1/5,000) .....	2
第3図	周辺遺跡分布図 縄文時代 .....	3
第4図	周辺遺跡分布図 古墳時代 .....	3
第5図	グリッド設定図 (1/250) .....	5
第6図	基本層序 .....	6
第7図	遺構配置図 (1/120) .....	8
第8図	縄文時代の遺構配置図 (1/120) .....	9
第9図	JSI-1 遺構図 (1/40) .....	10
第10図	JSI-2 遺構図 (1/40) .....	12
第11図	JSK-1・2・3・4・5 遺構図 (1/40) .....	13
第12図	JSI-1 出土土器 (1) .....	16
第13図	JSI-1 出土土器 (2) .....	17
第14図	JSI-2 出土土器 (1) .....	19
第15図	JSI-2 出土土器 (2) .....	20
第16図	JSI-2 出土土器 (3) .....	21
第17図	JSK-1 出土土器 .....	23
第18図	JSK-2・3 出土土器 .....	25
第19図	JSK-4 出土土器 .....	27
第20図	JSK-4・5 出土土器 .....	29
第21図	JSI-1・2、SX-1、JSK-3 出土石器 .....	30
第22図	SX-2・3 出土石器 .....	32
第23図	古墳時代の遺構配置図 (1/120) .....	33
第24図	SX-1 遺構図 (1/60) .....	34
第25図	SX-2、SS-1 遺構図 (1/20・1/60) .....	36
第26図	SX-3・4 遺構図 (1/20・1/60) .....	37
第27図	本遺跡出土の土器型式 .....	39
第28図	関東地方における有段式竪穴遺構分布 .....	40
第29図	有段式竪穴遺構形態分類 .....	43
第30図	右段式竪穴遺構形態分類消長 .....	43
第31図	同一個体土器遺構関連図 .....	44
第32図	善九郎遺跡出土土器 .....	45

# 挿 表 目 次

第1表	周辺の遺跡（縄文時代）	3
第2表	周辺の遺跡（古墳時代）	3
第3表	調査工程表	4
第4表	縄文土器観察表（1）	14
第5表	縄文土器観察表（2）	15
第6表	縄文土器観察表（3）	18
第7表	縄文土器観察表（4）	22
第8表	縄文土器観察表（5）	24
第9表	縄文土器観察表（6）	26
第10表	縄文土器観察表（7）	28
第11表	石器観察表	31
第12表	茨城県の有段式堅穴遺構一覽	41

# 図 版 目 次


図版 1	1. 遺構プラン検出状況 2. JSI-1 東西土層断面 3. JSI-1 完掘状況 4. 調査風景 5. 調査風景
図版 2	1. JSI-2 完掘状況 2. JSI-2 東西土層断面 3. JSI-2 遺物出土状況 4. JSK-1 完掘状況 5. JSK-1 土層断面
図版 3	1. JSK-2 完掘状況 2. JSK-2 土層断面 3. JSK-3 完掘状況 4. JSK-3 土層断面 5. JSK-4 完掘状況 6. JSK-4 土層断面 7. JSK-5 完掘状況 8. JSK-5 土層断面
図版 4	1. JSI-1・SX-1 完掘状況 2. SX-1 土層断面A-A' 3. SX-1 土層断面B-B' 4. SX-1 土層断面C-C' 5. SX-2 完掘状況 6. SX-2 土層断面A-A' 7. SX-2 土層断面B-B'
図版 5	1. SX-3 完掘状況 2. SX-3 完掘状況 3. SX-3 検出状況 4. SX-3 土層断面 5. 調査風景 6. SX-3 土層断面B-B' 7. SX-3 土層断面A-A' 8. SX-3 掘方完掘状況 9. SS-1 検出状況 10. SX-4 完掘状況 11. SX-4 南北土層断面
図版 6	1. SX-3 石棺完掘状況 2. SX-3 石棺解体状況
図版 7	JSI-1 出土土器
図版 8	JSI-2 出土土器（1）
図版 9	JSI-2 出土土器（2）
図版 10	JSK-1・2 出土土器

图版11 JSK-2·3 出土石器

图版12 JSK-4 出土石器

图版13 JSK-5、JSI-1·2、JSK-3、SX-1·2·3 出土石器·石器

# 凡 例

1. 検出遺構は下記の略号で表した。  
J S I…竪穴住居跡    J S K…上坑    S X…古墳    S S…集石遺構
2. 遺構実測図の縮尺については、図中にスケールで示した。
3. 遺構配置図中に5 m方眼に付したアルファベットおよび数字はグリッドの呼称でありアルファベットは北から南へAから順に、算用数字は西から東へ1から順に付している。
4. 遺構平面図中に付した方位は、同上座標の北を示す。
5. 遺構断面図中の水糸ラインに付した数字は、標高を表す。
6. 遺物実測図の縮尺については、図中にスケールを示した。
7. 遺物実測図中に示した網目（スクリーントーン）は磨り面を表す。  
 : 磨り面
9. 遺物観察表中の計測値の単位はセンチメートルである。また ( ) は推定値、< > は残存値を表す。

# I. 調査概要

## 1. 地理的位置と歴史的環境

### 地理的位置

友部町は茨城県のほぼ中央部に位置し、北西部を笠間市、東部を内原町・茨城町、南部は岩間町と行政域を接している。町域内の地形は、北半の丘陵地と南半の台地に区分される。前者は標高228mの金毘羅山を最高所にして北へ100～200m前後の峰が続いており、友部丘陵と呼ばれている。一方後者の台地は標高30～40mで東方へ続き、酒沼川に沿って大洗町方面にまでその広がりをのばしており、東茨城台地と呼ばれている。

笠間市の国見山付近に水源を持つ酒沼川は町域の南端を流れ、枝折川、酒沼前川を合せて東流し、酒沼に注いでいる。これらの河川は流域に沖積地を発達させ、現在では豊かな水田が拓かれている。古代にあっても良好な可耕地として利用されたことはあきらかである。また、暖地性植物分布の北限に近い友部町では、丘陵地域での植生では照葉樹と落葉広葉樹林が混交しており、カシ類、ツバキ類、イヌシダ・コナラ群類などの樹種が確認される。これは必ずしも原始・古代の植生を反映したものではないが、留意される点である。

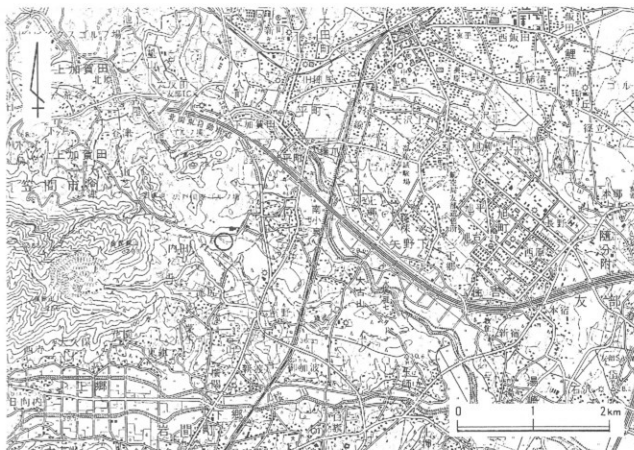
善九郎古墳群は、友部町の最西端に位置する古墳群であり、友部町南小泉に所在する。茨城県遺跡分布図では友部町のNo57遺跡として記録されている。富士山の南山麓で友部丘陵上にあり、桜川が酒沼川に合流する地点から4m西方にある。南小泉地内を縦断して、国道355号線が走っており、国道の西側に尖戸ヒルズカントリークラブがある。ゴルフ場の南側の緩斜面で、国道をまたがって縄文時代の善九郎遺跡が分布しており、その範囲内に古墳群がある。古墳群のうちゴルフ場建設の際に数基が失われたが、現在もレストハウス脇に1基、道路を隔てた南側民有地に4基の古墳を確認できる（友部町1900）。

今回の調査は国道からゴルフ場クラブハウスに通じる進入道路部分の友部町大字南小泉1535番地で、標高63mの友部丘陵にある。現在は山林で、調査区東側に隣接して善九郎古墳群1号墳が所在する。なお、調査区及び周辺の台地は、戦中に軍隊によって開墾され、その際に多くの古墳が破壊されたという。

### 歴史的環境

ここでは、発掘調査によって確認された縄文時代中期および古墳時代に関連する周辺の遺跡群を中心にみておきたい。

茨城県の縄文遺跡は、東京都大森貝塚に次いで明治12年に発掘調査された陸平貝塚（稲敷郡美浦村）をはじめ、椎塚貝塚（同・江戸崎町）、福田貝塚（同・東村）などに代表されるように研究の歴史は古い。しかしこれまでに発掘調査されてきた遺跡の多くは、利根川流域から霞ヶ浦の沿岸、および那珂川流域に集中しており、友部町の周囲には名の知られた縄文遺跡が見られない（川崎純徳他1979）。しかしながら縄文遺跡が存在しないわけではなく、「友部町史」によれば、町内には縄文早期から晩期にいたる36ヶ所の遺跡が確認されている。遺跡の立地は酒沼川流域をはじめ酒沼前川、酒沼川の支流・枝折川の沿岸およびこれらの河川にそそぎ込む小川の台地に分布するという。このうち本遺跡に関連する酒沼川の南岸には、中期の大古山遺跡があり、酒沼川に注ぐ小川の源となる野田沢池から谷津に入ると、中期・後期の内田遺跡、それに中期・後期とされる善九郎遺跡がある。本遺跡はその善九郎遺跡とは小文谷をはさんだ南側の緩斜面に立地している。このような縄文遺跡のうち、中期に形成された遺跡が20箇所を数え、この時期の盛行した様子が窺える。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000) ○印



第2図 調査地点位置図 (1/5,000)



本遺跡が形成された縄文中期中葉の土器様相では、筑波山—霞ヶ浦ラインを境にして、南北に違いが認められる。(塚本節也 2000)。その北半側に分布する本遺跡は、在地的な土器が土器組成の主体であり阿玉台式をはじめ、東北南部の大木式、関東西部の勝坂式なども伴っており、各地域との文化的交流が窺える。

古墳時代では、茨城県下は関東地方でも群馬・千葉県につく古墳、古墳群が存在しているところである。とくに常陸太田、ひたちなか、石岡周辺、そして霞ヶ浦の北岸・南岸には、古墳群が集中して形成された。茨城県における古墳の特徴は、前方後円墳の造営が7世紀代にまで引きつがれることであり、東国でも特異な事象となっている。また、方墳の発達や組合式箱式石棺の埋葬施設を多く採用するなどにも特色がある。

友部町の古墳は涸沼前川流域に多く集中しており、柳沢古墳群・一本松古墳群などの例が確認される。また東部に芝沼古墳群、南部に佐藤林古墳群、善九郎古墳群などが所在している。

さて、これらを造営した集団の集落跡は古墳群と対応するように存在していると思われるが、その分布は必ずしも明確ではない。町史によれば、涸沼前川、涸沼川流域の丘陵台地上にはそれぞれ10箇所近くの散布地が認められており、古墳時代前・後期の集落跡が存在するとみられる。1997年からはじまった北関東自動車道関係の遺跡調査や翌年の総合流通センター事業地内の遺跡調査により、涸沼川沿いの地域で、古墳A・B遺跡、仲丸遺跡、久保塚遺跡などの当該期の集落が明らかにされた。このうちとくに仲丸遺跡では、後期に属する住居跡22軒が検出され、町域では最大の集落跡となっている。また、同じく平成15年度に行われた小原地区内北区の小原遺跡の調査(服部敬史他 2004)では、古墳時代前期の住居跡が発見されて、従来の空白を埋めることとなった。

(伊藤俊治)



第3図 周辺遺跡分布図 縄文時代



第4図 周辺遺跡分布図 古墳時代

遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名
1	結丹遺跡	11	坂場遺跡	21	家前遺跡	31	八幡台遺跡
2	秩父遺跡	12	小栗寺遺跡	22	五平内遺跡	32	城の内遺跡
3	仁台遺跡	13	山内・金山遺跡	23	堀式遺跡	33	堀式遺跡
4	藤仁古田遺跡	14	獅子塚遺跡	24	本郷遺跡	34	鹿山遺跡
5	佐倉遺跡	15	地保遺跡	25	下田遺跡	35	北山不動尊遺跡 (石山神)
6	寺山遺跡	16	柳城遺跡	26	新南柳北朝遺跡	36	石山柳遺跡
7	川原地区西側遺跡	17	松岡台遺跡	27	岡小島遺跡		
8	上野遺跡	18	宝前本郷遺跡	28	善九郎遺跡		
9	鹿丸寺遺跡	19	久保塚遺跡	29	内白遺跡		
10	大光山遺跡	20	家成遺跡	30	完全寺遺跡		

第1表 周辺の遺跡(縄文時代)

遺跡番号	遺跡名
1	柳沢古墳群
2	旗塚古墳群
3	一本松古墳群
4	高寺古墳群
5	佛郎堂古墳群
6	澤中塚古墳群
7	五平古墳群
8	佐藤林古墳群
9	善九郎古墳群
10	芝沼古墳群
11	柳丸塚古墳群

第2表 周辺の遺跡(古墳時代)

## 2. 調査に至る経過

穴戸ヒルズカントリークラブは岩間町に続く国道355線の西方にあり、クラブハウスへは、国道から狭い道を通行するため不便を来していたようである。このため株式会社穴戸国際ゴルフ倶楽部は、新たに国道の東南方向からクラブハウス正門に通じるアプローチ道路を建設する計画をした。クラブハウスの脇には善九郎古墳群（友部町№57遺跡）を構成する高塚古墳が1基、道路をへだてた南側民有地内に4基が確認されていた（友部町史 1990）。このためゴルフ倶楽部から友部町教育委員会に、アプローチ道路工事地内における埋蔵文化財の存否について照会がなされた。

アプローチ道路の設計では、クラブハウスのすぐ南側にあたる標高63mの山林地の南小泉1535番地2の400㎡ほどが切土されることになっている。照会を受けた友部町教育委員会では、当該地の西側に隣接して善九郎古墳群もあるため、埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、平成15年12月13日に、萩原義照氏を担当者として実施された。試掘は重機（バックホー）により任意に設定されたトレンチが4本、108㎡が掘削されて、古墳の周溝と見られる溝状遺構および時代不明の土坑の存在、それに縄文土器数点などが確認され、善九郎古墳群が東側に拡がっているものと判断された。

この結果を基にして、友部町教育委員会と株式会社穴戸国際ゴルフ倶楽部は工事着工前の本調査に向けて協議し、切り土対象となる400㎡を調査対象として、発掘調査を大成エンジニアリング株式会社に委託して実施することで合意された。

大成エンジニアリング株式会社は、伊藤俊治を調査担当者とし、平成16年1月13日付で文化財保護法第57条に基づく発掘届を友部町教育委員会を経由して茨城県教育委員会教育長宛に提出したところ、2月13日付文250号で同教育長より発掘通知があった。そこで平成16年2月16日から発掘調査を開始し、2月27日に終了した。（伊藤）

第3表 調査工程表

作業内容	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
調査区設定・準備	■											
表土掘削		■										
遺構検出			■									
遺構調査			■	■	■	■	■	■	■	■	■	
全景撮影										■		
埋め戻し												■

### 3. 調査方法

調査対象となった地点は、クラブハウスへの出入口部に直交する道路に接するすぐ南側で、アプローチ道路として建設されることになった切土範囲の東西13m、南北26mが調査対象とされた。そこでこの範囲の北西隅を基点として5mのグリッドを設定して、東西を西側から算用数字で1区から4区、南北を北側からA区からF区とした。南北の方位はN16°Eを指す。

調査区を設定した後、調査区北東隅より重機による表土掘削を開始したところ、深さ50cm程でローム面に達した。この間の上層は盛り土と旧表土の攪乱土で本来の遺物包含層は失われて存在せず、直接、遺構確認面となるローム土に達した。太平洋戦争時に軍隊により閉塞された際に、多くの古墳が破壊されたという(試掘調査報告書による)。あるいはそのときに削平され、攪乱がなされたのかも知れない。このため、その後は鋤簾等を使用した人力掘削により遺構検出作業を行った。

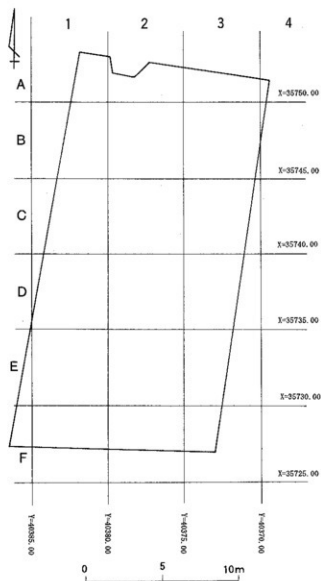
検出作業の結果、古墳時代の溝と石棺および縄文時代の住居跡等が確認された。遺構プラン全景写真を撮影後、古墳時代の遺構から調査を開始した。試掘調査では縄文土器片が出土したが、遺構との関係がなく、当初は古墳に関わる遺跡として認識されたが、縄文時代の集落が複合していた。

個別遺構の調査は、適宜プラン写真を撮影後、セクションを設定し、覆土を掘削した。遺構番号の呼称は、遺構の種別ごとに算用数字を用い、1番からの順番とした。

出土遺物は、原則として遺構ごとに一括上げした。写真による記録は、35mmモノクロおよびカラーリバーサルにより適宜行った。また、管理写真は主にネガカラーを使用した。図面による記録は、平面位置は調査区東側に設定されていた工事用の基準杭を便宜上使用し、平板により測量した。また、土層断面も基準杭の標高を基に眼高を設定し、これを基準に実測した。

古墳時代の遺構調査終了後、同様の手順・方法により縄文時代の遺構調査を行った。

全ての遺構調査終了後、重機による埋め戻し作業を行い現状を復した。



第5図 グリッド設定図 (1/250)

#### 4. 基本層序

調査区の現況はほぼ平坦な栗林であり、地形的には台地の南緩斜面に位置する。調査区域の一带は、基盤となるローム層まで50cmほどの堆積であるが、この間は客土や表土（耕作土）ばかりで、縄文時代やそれ以降の遺物包含層自体が存在しない。ローム層上面において遺構の掘り込み状態を観察することでおこなった。

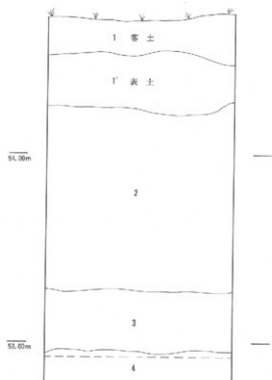
調査区北西隅に2×1m、深さ2m程の深堀トレンチを設定して、遺跡内における基本土層を観察したところ、大きく4層に区分される。

第1層：50cm。現況面から20cm程は盛土ないし客土が覆い、その下に黒色土を主体とした表土（耕作土）が30cm程堆積している。

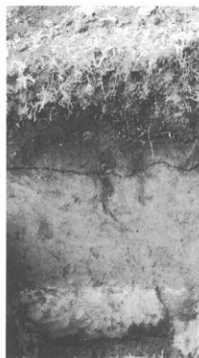
第2層：いわゆるローム土で、100cm程が水平に堆積している。

第3層：約3万2千年前の赤城山起源の鹿沼土で、「アワ土」と称される黄褐色火山灰土。層厚は30cm程。

第4層：しまりがやや弱いローム層。



第6図 基本層序



基本層序の写真

## II. 検出された遺構と遺物

### 1. 縄文時代の遺構・遺物 (第8図)

#### (1) 竪穴住居跡・土坑

発掘調査により検出された縄文時代の遺構は、中期中葉の竪穴住居跡 (JSI) が2軒と貯蔵用の土坑 (JSK) が5基である。

#### JSI-1 (第9図・図版1)

本住居跡は、調査区中央や南寄りのD-2グリッドで、たまたまSX-1古墳が構築された内部中央に取まるように位置しており、遺存状態は良好である。形状は、東側に柄杓状の張出しをもつ方形住居のようであるが、中期末の時期ではないので、この張出しは古墳主体部の掘り込みであった可能性もある。すなわち、住居跡の北西上に絹雲母片岩の一群があるが、戦時中に軍隊により開墾されたときに古墳の高まりが破壊され、掘り込み主体部から抜き取られた組石石棺の一部であるのかも知れない。

張出し部をこのように見ると、北側と南側住居跡では床面に段差があり、2軒が重複した可能性も考えられたが、断面観察では新旧関係ははっきりしなかった。

住居跡の規模は、一段低い隅丸方形のプランを呈する南側では、長軸320cm、短軸300cm、深さ46cmを測り、炉は検出されなかった。床面は平坦で、部分的に硬化が認められた。中央部と壁際から6本のピットないし柱穴が検出された。床中央部の三角形に配列されたピットは径16~20cm、深さ16~22cmであり、東壁を除く3方の壁際中央のピットは径36~56cm、深さ50~80cmと規模が大きく、主柱穴と考えられる。覆土は3層に区分されるが、自然に埋没した状態を呈している。

住居内覆土中より大木8a式、阿玉台皿式、IV式土器が出土した。

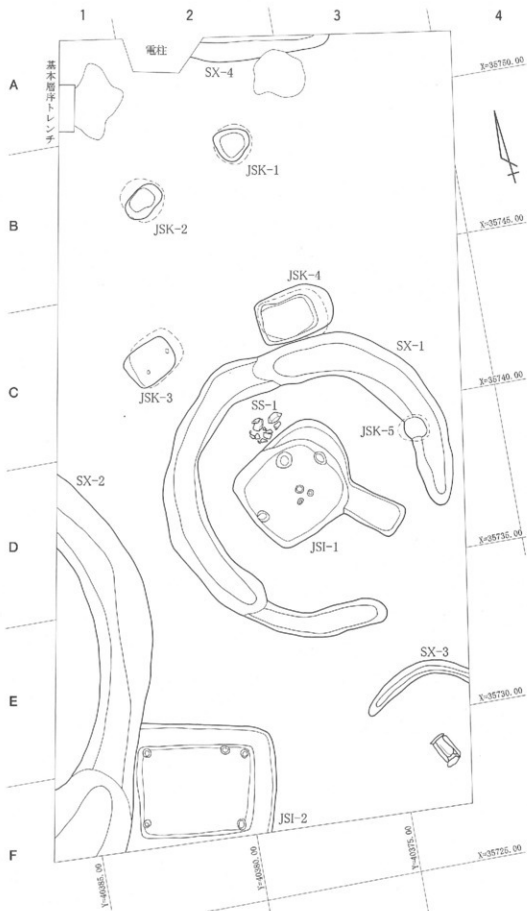
なお、長方形の張り出し部 (古墳主体部?) の方は、規模は長軸190cm以上、短軸100cm、確認面からの深さは12cmを測る。

#### JSI-2 (第10図・図版2)

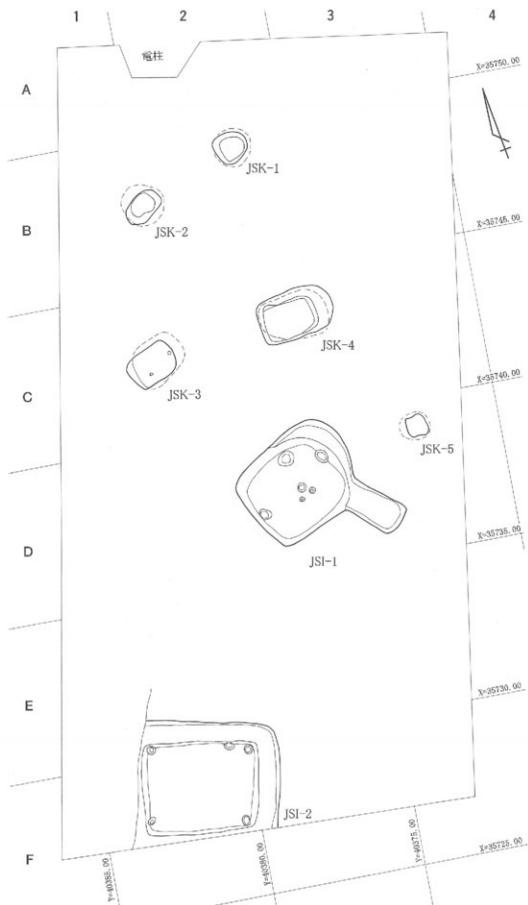
本住居跡は、調査区南側のE-1・F-1グリッドに位置する。住居プランの西壁上部は古墳時代の溝 (SX-2) により壊されており、南壁側は調査区外にあるため全容は確認できていないが、線対称を呈すると見てよいので、二段掘り込みの住居跡 (有段式竪穴遺構) と思われる。

住居跡プランは、方形よりもやや長い東西に主軸をとる長方形で、その規模は、上段で長軸520cm (推定)、短軸420cm (推定)、確認面からの深さ20cmを測る。下段では長軸368cm、短軸296cm、床面からの壁高60cmを測る。そして、上段壁際50~60cm幅がテラス状を呈している格好である。

床面は所々凹凸があるもののほぼ平坦に構築されており、僅かながら硬化した部分もみられる。炉は検出されていないが、僅かながら床面上に焼土粒を確認している。掘り込みの地床炉ではなかったにしろ、何らかの炉としての施設が掘えられていたのであろう。柱穴は下段四隅の壁際に4本と北東隅に近い北壁際から1本が検出されている。4本はほぼ似た規模で、径24~32cm、床面からの深さは50~70cmを測る。しかし上段の方に柱穴らしい施設は検出されなかった。

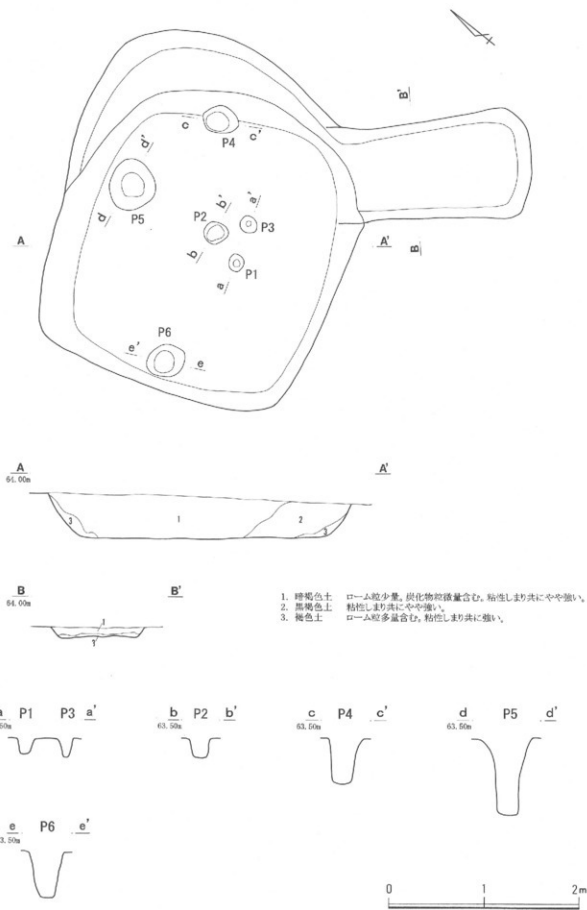


第7図 遺構配置図 (1/120)



第 8 図 縄文時代の遺構配置図 (1/120)





第9図 JSI-1遺構図 (1/40)

覆土は3層からなり、上層と中層が大平を占めており、壁際にわずかに三角堆土が見られる。この堆積状態からは自然に埋没したと思われる。

住居内覆土中より大木8a式Ⅳ阿玉台、式土器などが出土している。SⅠ-1とほぼ同時かいくぶん古い住居かも知れない。

#### JSK-1 (第11図・図版2)

調査区北側のB-2グリッドに位置する、フラスコ状を呈する袋状土坑。平面形は、やや歪んだ径100cm程の円形を呈し、確認面から底面までの深さは125cmを測る。

底面径は150cm程で平坦に構築されており、底面から75°の角度で内傾して立ち上がり、90cm程からは開き加減に立ち上がる。当初の形態は円筒状に縦坑が構築されたが、上縁側が崩落して開口するようになったのであろう。

覆土は3層に区分され、北側から流れ込んだような堆積状態を呈する。

本土坑は、規模形状および遺物の出土状況からして貯蔵穴であると思われる。

#### JSK-2 (第11図・図版3)

調査区北西部のB-1グリッドに位置する、フラスコ状を呈する袋状土坑。確認面での平面形は、長径130cm、短径84cmの楕円形だが、深さ110cmの室上縁では径140cm程の不整形円形を呈する。底面までの深さは確認面から120cmを測る。

底面は径130cmのほぼ円形を呈し、平坦に構築されている。壁は全体として底面から70°の角度で内傾して立ち上がるが、壁高90cm程からは開き加減に立ち上がる。

覆土は3層に区分され、平坦に堆積している。上2層は暗褐色土が主体でややしまっているが、下層はロームブロックを多く含んだしまりのない暗黄褐色土が主体となっている。

覆土中からは中期土器片が少量出土しているが、時期判別できるものはない。本土坑も規模形状から貯蔵穴であると思われる。

#### JSK-3 (第11図・図版3)

調査区中央部やや西寄りのC-1グリッドに位置する。平面形状はやや丸みを帯びた長方形を呈する。規模は長軸160cm、短軸120cm、確認面からの深さは85cmを測る。

底面は長軸170cm、短軸135cm程で平坦に構築されており、東側および西側にそれぞれ1個ずつピット状の窪みが見られる。開口部と底面は一致しない。或いは、西壁側が大きく崩落した袋状土坑で、人為的に掘り起こされて埋め戻された姿なのかも知れない。

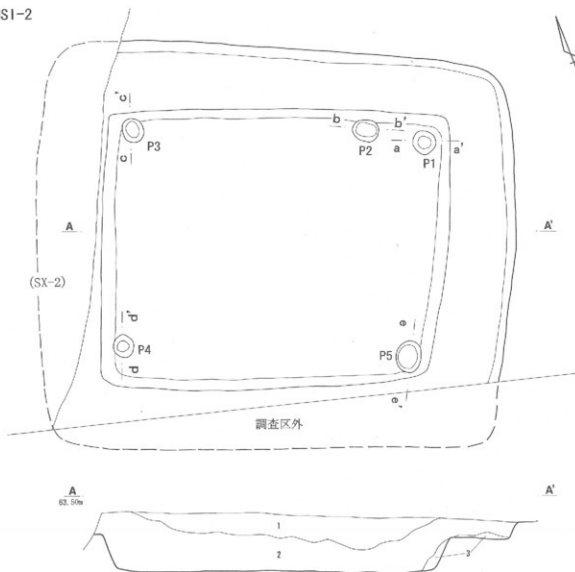
覆土は2層に区分され、西から東へ流れ込んだような堆積状態を呈する。

なお、底面のピット状の窪みが逆茂木の跡とすれば陥穴かも知れないが、他の土坑とも関連しながらSⅠ-1住居跡と近接しており、同様に貯蔵穴の可能性が高い。勝坂3式の大形破片が出土している。

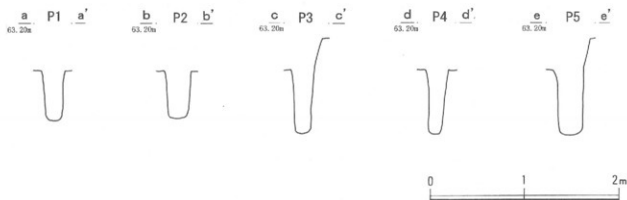
#### JSK-4 (第11図・図版3)

調査区中央やや北寄りのC-2グリッドに位置するフラスコ状を呈する袋状土坑であるが、当初の形態を大きく改変している。平面形は、東側がやや丸味を帯びているものの、全体としては東西方向に長軸を持った長方形を呈する。検出された土坑の中では最も規模が大きく、長軸250cm、短軸160cm、確認面からの深さは140cmを測る。

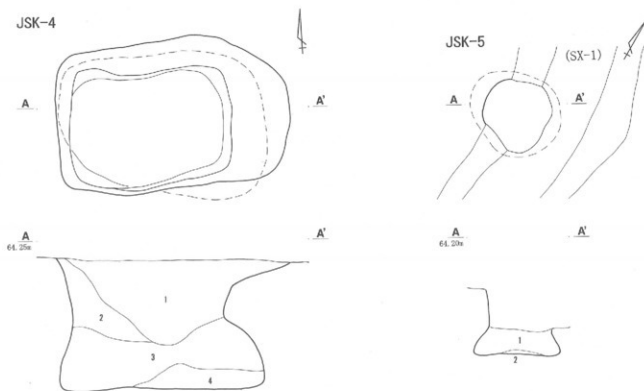
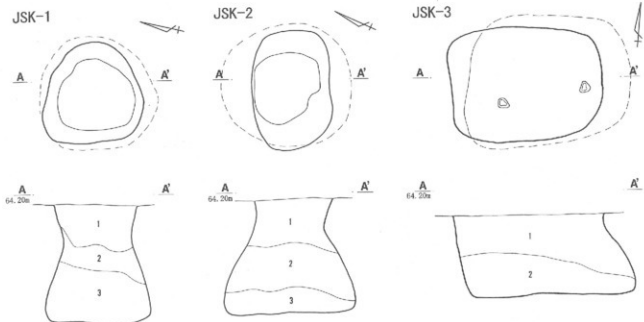
JSI-2



- |         |                            |
|---------|----------------------------|
| 1. 黒褐色土 | ローム粒、炭化物粒少量含む。粘性しまり共にやや強い。 |
| 2. 暗褐色土 | ローム粒少量含む。粘性しまり共にやや強い。      |
| 3. 褐色土  | ローム粒多量含む。粘性しまり共に強い。        |



第10図 JSI-2遺構図 (1/40)



1. 暗褐色土 粘性弱く、ややしまっている。
2. 暗黄褐色土 ロームブロック・粒多量含む、粘性弱くややしまっている。
3. 暗黄褐色土 ローム粒少量含む、粘性しまり共にやや弱い。

1. 暗褐色土 ローム粒少量含む、粘性弱くややしまっている。
2. 暗褐色土 ローム粒多量含む、粘性弱くややしまっている。
3. 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む、粘性しまり共にやや弱い。

1. 暗褐色土 粘性弱く、ややしまっている。
2. 暗黄褐色土 ロームブロック・粒少量含む、粘性しまり共に強い。

1. 暗褐色土 粘性弱く、ややしまっている。
2. 暗褐色土 ローム粒少量含む、粘性しまり共にやや強い。
3. 暗褐色土 ロームブロック・粒少量含む、粘性弱く、ややしまっている。
4. 暗黄褐色土 ロームブロック・粒多量含む、粘性しまり共にやや弱い。

1. 暗褐色土 ローム粒少量含む、粘性弱く、ややしまっている。
2. 暗黄褐色土 アワ土少量含む、粘性弱く、ややしまっている。



第11図 JSK-1・2・3・4・5遺構図 (1/40)

底面は長軸220cm、短軸150cmの楕円形をなし、平坦に構築されている。南西側を除けば底面から内傾して立ち上がり、壁高80cm位からは開き加減に立ち上がる。

覆土は4層に区分され、暗褐色土を主体とするが、下層ほどロームブロックが多く混入している。この混入の具合は、上坑の機能を停止するにあたり上縁側を崩して埋め戻したためであろう。覆土中から阿玉台Ⅲ式、Ⅳ式、大木8a式などが出土した。

規模形状から貯蔵穴であると思われる。

#### JSK-5 (第11図・図版3)

調査区東壁近くのD-3グリッドに位置する小規模な袋状土坑であるが、古墳の周溝(SX-1)に掛かって大きく壊されており、遺存状態は良くない。平面形は径80cm程の不整形円形を呈し、深さは70cmを測る。底面は径80cm程で、ほぼ平坦に構築されている。壁は全面とも30cm位までは内傾しており、上方は円筒状に立ち上がる。

覆土は上方が削除されている関係もあり、確認範囲では2層に区分され、下層は中央部に僅かに堆積する。

大木8a式土器片などが少量出土した。本土坑は、他の4基よりも規模が小さいものの袋状を呈する形状から、やはり貯蔵穴であると思われる。(伊藤)

#### (2) 縄文土器・石器

発掘調査で出土した縄文時代の遺物には、縄文中期中葉の土器と石器がある。土器は、復元された8個体およびコンテナ(縦40cm×横60cm×深さ20cm)6箱の分量で、これらは遺物包含層自体が消失している関係もあり、すべて住居跡および土坑からの出土である。土器の詳細は観察表に留め、土器から提起される問題等についてはⅢ章で考察する。また石器は7点で、このうち4点は磨石である。

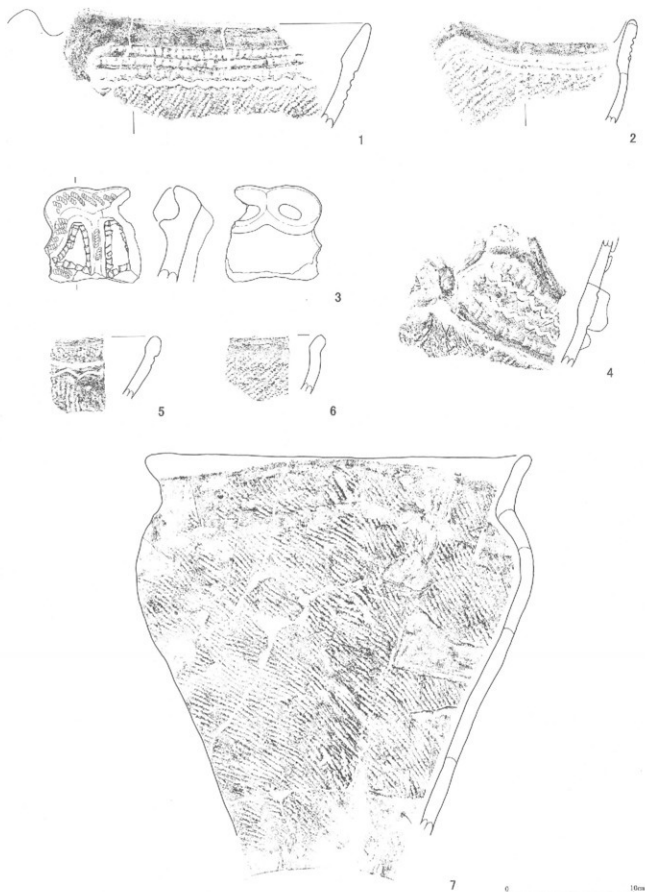
第4表 縄文土器観察表(1)

遺構名	棟号 番号	図版 番号	型式 名	口径	器高	底径	器形・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
JSI-1	12-1	7-1	大木 8a 式	(38.0)			大形深鉢の口縁部。左端の突起部は小さく…山をなすらしいが左側を欠損する。文様部は竹管状工具による押引きが3条、以下に同工具による小波状沈線が施されている。縄文は3本巻りのRL。	長石・金雲母を含む。	良好	明褐色	
	12-2	7-2	大木 8a 式	(18.0)			1を小形化したような波状口縁の深鉢。スリットがある波頂の波状口縁にそって沈線が3条、その下に同じ竹管状工具の先端を縦に列点状に押し付けている。3本巻りの縄文RLを縦に施文している。	長石・金雲母等の砂礫を多量に含む。	良好	明褐色	
	12-3	7-3	阿玉 台Ⅳ 式				磁ネクタイ様の高まった量感ある突起部で、内面は限鈍状を呈する。縁部の隆起帯には縄文が、その裾には竹管状工具による押引き文が施されている。	長石・その他を多量に含む。	普通	褐色	
	12-4	7-4	阿玉 台Ⅲ 式				二股の波状口縁深鉢であるが、波頂部を欠損する。口縁部文様帯の内部に、幅広い竹管状工具によるキャラビラ文と小波状沈線が充填する。	長石等の砂礫と細かい金雲母を含む。	普通	褐色	

第5表 縄文土器観察表(2)

遺構名	採回 番号	図版 番号	型式 名	口径	器高	底径	器形・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
JS1-1	12-5	7-5					いくぶん肥厚する口縁を沈線で区画し、R Lの縄文地に波状沈線を施した深鉢。	長石・その他の砂礫を含む。	普通	暗褐色	
	12-6	7-6					膨らみ加減の上手から口唇が小さく外反する深鉢。器全面に縄文R Lが施される。	大粒の長石・細かい金雲母を多量に含む。	普通	暗褐色	
	12-7	7-13		30.2	<29.8>		胴上位で大きく膨らんでから、巨くびれ、口縁が外反する深鉢。器全面に無節の縄文Lが縦位に施文されている。	大粒の長石・細かい金雲母を多量に含む。	普通	暗褐色	
	13-1	7-7			<13.0>		胴中ほどの屈曲部で、結上帯が剥脱して鋭口縁を呈する深鉢の下半部。器全面に縄文R Lが縦位に施されている。上縁径19.5cm、下縁径14.2cm。	長石・金雲母等の砂礫を多量に含む。	普通	褐色	
	13-2	7-11			<5.8>	9.8	深鉢の底部付近。無節の縄文Lが施されており、底部付近では磨消されている。	長石・その他の砂礫を含む。	普通	褐色	
	13-3	7-10				(9.4)	無文に器面調整された底部付近で、上縁にわずかに縄文が認められる。	大粒の長石・細かい金雲母を多量に含む。	普通	褐色	
	13-4	7-8		(26.0)	<6.4>		無文の浅いボウル状の浅鉢。外面は一次調整の砂粒の移動痕が顕著、内面は丁寧に二次調整されて平滑。	長石等の砂礫と細かい金雲母を含む。	普通	褐色	
	13-5	7-9					口縁内面の2.7cmで稜をなす浅鉢。外面は一次調整の砂粒の移動痕(か・石)が顕著、内面は丁寧に二次調整されて平滑。	長石等の砂礫と細かい金雲母を含む。	普通	褐色	
	13-6	7-12			<9.8>	(10.0)	底面から低い角度で直線的に立ち上がる無文の浅鉢。外面は一次調整、内面は二次調整で平滑。底部に制代の痕跡。	長石等の砂礫と細かい金雲母を含む。	普通	褐色	
	13-7	8-5			<3.3>	10.4	底面から低い角度で直線的に立ち上がる無文の浅鉢。外面・底面は一次調整であるが比較的平滑、内面は二次調整で平滑。	長石・その他の砂礫を含む。	普通	褐色	
JS1-2	14-1	8-1	大木 8 a 式	(34.0)			口縁がわずかに外反して体部が大きく膨らむ深鉢。全体に着手のつくりであるが、口縁は肥厚する。くびれ部にV状の貼付あり、R Lの縄文に沈線2条と扇状沈線が引かれ、体部には上向き弧状沈線が引かれている。	長石・その他の砂礫を多量含む。	普通	褐色	

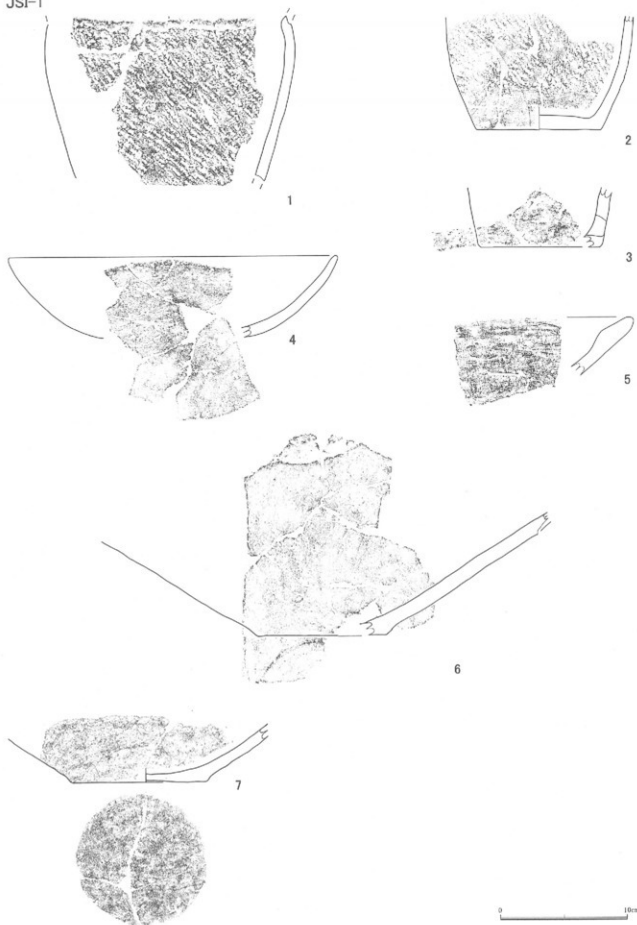
JSI-1



第12圖 JSI-1出土土器(1)



JSI-1



第13图 JSI-1出土土器(2)

第6表 縄文土器観察表(3)

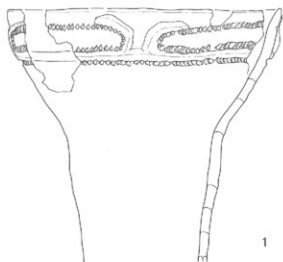
遺構名	挿図番号	図版番号	型式名	口径	器高	底径	器形・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
JSI-2	14-2	8-2	大木8a式				開口する口縁部が胴上部ゆるく屈出し、直線的に垂下する深鉢。横波沈線および小波状沈線で文様帯を区画し、右端の垂下する隆起帯を縦区画している。	長石・金雲母等の砂礫を多量に含む。	普通	暗褐色	
	14-3	8-4	阿玉台IV式				深鉢胴部の破片。幅広い低い隆起帯の裾に沿って、結節沈線・竹管状工具による蛇行沈線が垂下する。地文の縄文はRL。	長石・金雲母等を多量に含む。	普通	褐色	
	14-4	8-3	勝坂III式				緩くくびれる深鉢の胴部破片。くびれに沿ってめがらされた3本の沈線と垂下する隆起帯で画された内部の縄文地に蛇行沈線が施されている。	大粒の長石・細かい金雲母を含む。	良好	褐色	
	14-5	8-6		22.0	25.3	9.0	胴上部でゆるく屈折して開口する深鉢。口縁から底部付近まで、歯齒状工具(15mm幅に6本歯)による蛇行沈線が垂下している。底面には網代汗痕の磨消しが認められる。	大粒の長石・細かい金雲母を多量に含む。	良好	褐色	
	15-1	8-7	阿玉台III式	29.6	<28.0>		胴上部でゆるく屈折して大きく開口する深鉢。隆起帯をめぐらし口縁部文様を区画し、その内部に4箇所ほどX状貼付を設けて積円杵を構成する。積円杵には押し文がめぐらされ、一部に縄文(R・L)が施されている。浅鉢の文様構成に体部がついた深鉢のようだ。全面にも縄文が縦位に施されているが、平周分は器壁が乾いたらしく縄文が浅い。器風の荒れが目立つ。	長石・その他砂礫を多量に含む。	普通	褐色	
	15 2	9-1	阿玉台IV式				阿玉台式の典型的な波状口縁深鉢の口縁部。中央を垂下する隆起帯と口唇には縄文L Rが施されており、裾に沿ってはキタビラ文と小波状沈線が施されている。	長石・金雲母等の砂礫を多量に含む。	普通	暗褐色	
	13-3	9-2					7と共通する波状口縁深鉢。隆起帯と縄文帯は7よりも明瞭で、区画内に沈線と口唇にはL Rの縄文、裾に沿ってはキタビラ文が施されている。頸部には歯齒状線が施されている。	長石・金雲母等の砂礫を多量に含む。	普通	暗褐色	
	15-4	9-3	勝坂III式				横走する隆起帯に耳状突起が付され、両側にキタビラ文と小波状沈線が施されている。	大粒の長石・細かい金雲母を多量に含む。	良好	褐色	
	15-5	9-5					小形深鉢の底部付近。無文で内外底面ともあまり丁寧には調整されていない。底面は網代痕を粗雑に磨消したらしい。	大粒の長石・細かい金雲母を多量に含む。	良好	褐色	

JSI-2

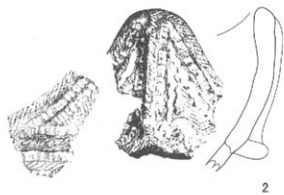


第14图 JSI-2出土土器(1)

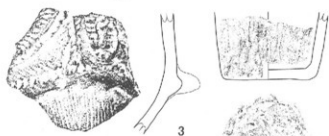
JSI-2



1



2



3



4

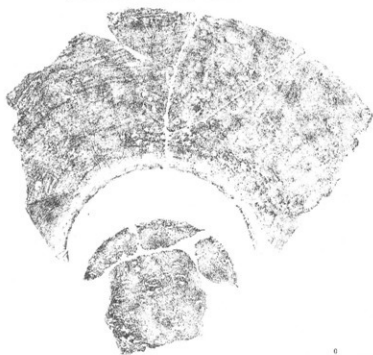
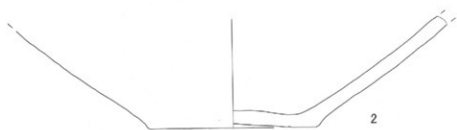
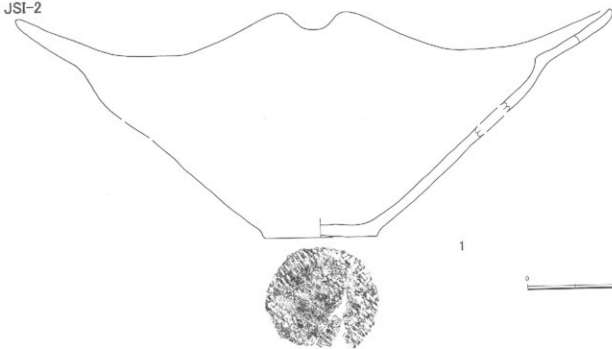


5



第15图 JSI-2出土土器(2)

JSI-2

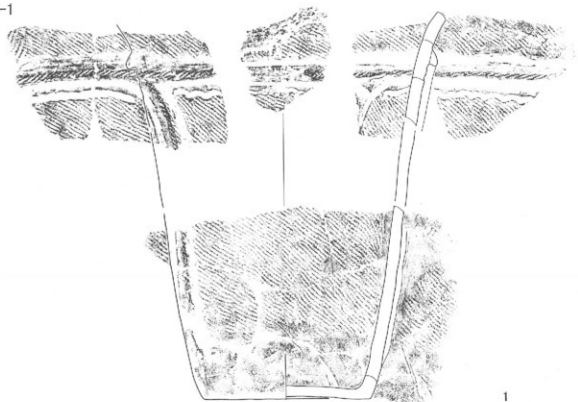


第16图 JSI-2出土土器(3)

第7表 縄文土器観察表(4)

遺構名	採回 番号	図版 番号	型式 名	口径	器高	底径	器形・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備 考
JSI-2	16-1	9-4		(62.0)		12.0	径が60cmを超すらしいかなり大形の浅鉢で、二股の波状口縁をなすらしい。内面の5cmで縁をなし屈曲する。外面は雑な器面調整で、内面は丁寧で平滑。底部にはわずかに網代痕を残す。	大粒の長石・細かい金雲母を多量に含む。	良好	褐色	
	16-2	9-6			<8.0>	12.0	36度の角度で直線の立ち上がる大形で無文の浅鉢。口縁部を欠く。外面は粗雑な器面調整、内面は丁寧で平滑に調整されている。	大粒の長石・細かい金雲母を多量に含む。	良好	褐色	
JSK-1	17-1	10-1	阿玉 台Ⅳ 式			13.0	深鉢。口縁部に縄文が施された太い隆起帯がめぐらされ、肩部にはくっきりした沈線と小波状沈線が施されている。全体に筋の細かい縄文R Lが縦位に施されている。	長石・細かい金雲母がめだつ。	普通	明褐色	JSK-2から 同個体出土
	17-2	10-2	勝飯 皿Ⅲ 式				深鉢。器全面に縄文R Lが縦位に施されており、垂下する隆線が中途で盲孔ある突起として配置されている。縄文はR L。	長石・細かい金雲母がめだつ。	良好	褐色	
	17-3	10-3		(20.5)	<28.5>		口縁が大きく開口する深鉢。器全面に3本摺りの縄文R Lが縦位に施されており、一部に結節が認められる。	長石・細かい金雲母がめだつ。	普通	褐色	
	17-4	10-5		(29.0)	<26.5>		器全面が無文の深鉢。上半は平滑であるが、下半では下から上に粗雑に器面調整されている。	長石・細かい金雲母を多量に含む。	不良	橙褐色	JSI-1から 同個体出土
	17-5	10-4					浅鉢の頸部文様帯にあたる破片で、無文地に上下から交互に縦沈線が施されている。内外面に赤彩痕。	大粒の金雲母	良好	明褐色	
JSK-2	18-1	10-6	大木 8 a 式				口唇がとがり気味、口縁が小さく屈曲して体部が膨らむ深鉢。頸部に交互突起、体部には縄文R L地に扇歯状沈線が施されている。器内面の調整が丁寧。炭化物付着。	細かい長石・金雲母を含む。	良好	明褐色	
	18-2	10-8					縄文R L地に2条の波状沈線が施されている。	長石・金雲母を多量に含む。	良好	褐色	
	18-3	10-7					胴上部から大きく屈折して外反する深鉢。縄文R Lに竹管状工具による平行沈線。器内面は調整が丁寧で平滑。	金雲母を多量に含み、長石は目立たない。	良好	黒褐色	
	18-4	10-10				(8.0)	縄文(3本摺りのR L)の結節を縦位に施文している。	細かい長石・金雲母を含む。	良好	褐色	

JSK-1



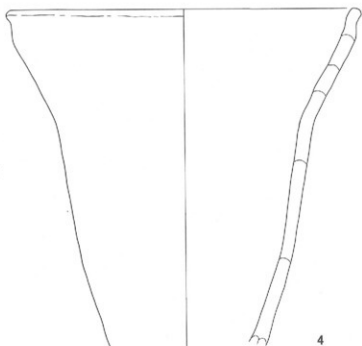
1



2



3



4



5



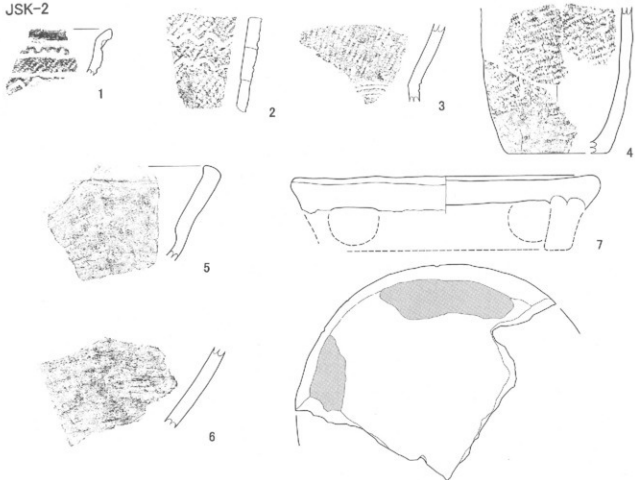
第17图 JSK-1出土土器



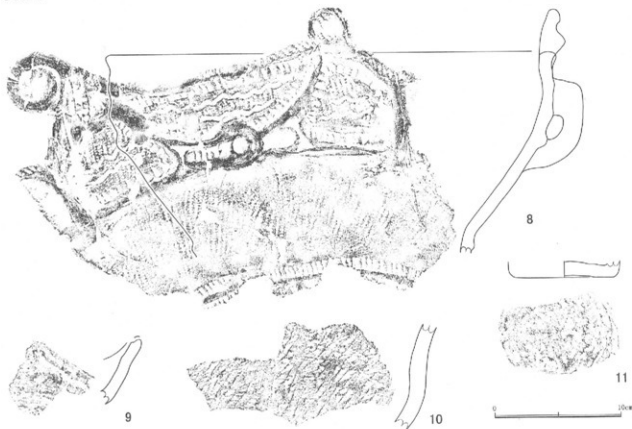
第8表 縄文土器観察表(5)

遺構名	採回番号	図版番号	型式名	口径	器高	底径	器形・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
JSK-2	18-5	10-9					内面に稜をもつ無文の波状口縁の深鉢。	長石・金雲母を多量に含む。	良好	褐色	
	18-6	10-11					5と同個体の浅鉢の破片。器内面が丁寧に調整。	長石・金雲母を多量に含む。	良好	褐色	
	18-7	11-1			(24.5)		全周の4割強が遺存する台形土器。後縁部では2.3cm、中央部は1.8cmの器厚。器下面の四方に円窓をもつ脚部があったようで、剥脱し痕(アミ範囲)がある。	大粒の長石・細かい金雲母を含む。	普通	褐色	
JSK-3	18-8	11-5	勝坂Ⅲ式	(37.0)	<19.0>		隆帯で楕円・三角棒状文構図が描かれる西岡東系の大形深鉢。隆帯の裏に幅広い角押文が、区画内には小波状沈線文が充填されている。地文の縄文使用は阿玉台Ⅳ式に通じる地元色か。	長石・細かい金雲母がめだつ。	普通	褐色	
	18-9	11-2					小形の無文鉢。あまり丁寧に器面調整されていない。	大粒の長石・細かい金雲母を多量に含む。	普通	褐色	
	18-10	11-3					深鉢の胴部。器面全体に太い熱りの縄文Rを縦位に施文。厚手のつくり。	金	普通	褐色	
	18-11	11-4			8		10の底部。底面の中央が上げ底気味。	大粒の長石を多量、細かい金雲母を少量含む。	普通	褐色	
JSK-4	19-1	12-1	大木8a式	17.5	22.8	9	四方に拳状の退化した肉厚の突起をもつ細身の深鉢。縦位施文の縄文(RL)を施文に、口縁下に3本のゆるい結節沈線、以下に2本単位の蛇行沈線と弧状の組み合わせによる絵画風モチーフが描かれている。底部には網代痕を磨消した痕跡がある。	長石・細かい金雲母がめだつ。	普通	褐色	
	19-2	12-2	大木8a式				棒状の貼付を境に左側には縄文L、右側には熱りの太さが異なる縄文(L)を縦位に施文している。	長石・その他の砂礫が多く、金雲母は含まない。	良好	黄褐色	
	19-3	12-3	阿玉台Ⅳ式	(30.2)	<13.2>		大きく高まった楕円突起を四方に配して、胴上部から四角深鉢。口縁および頸部も隆帯の貼付があり、嵐感がある。口縁および頸部下には縄文Rしが、隆帯の裏には角押文および鋭角的な波状文が施文される。	長石・細かい金雲母がめだつ。	良好	褐色	JSK-5から同個体出土
	19-4	12-4	阿玉台Ⅲ式				内湾する大きな波状口縁の深鉢で、波頂にスリットが加えられている。口縁下に角押文とラフな押引文が廻り、その下に細密な楕円状文が縦位に蛇行する。	細かい長石・金雲母がめだつ。	良好	褐色	

JSK-2



JSK-3

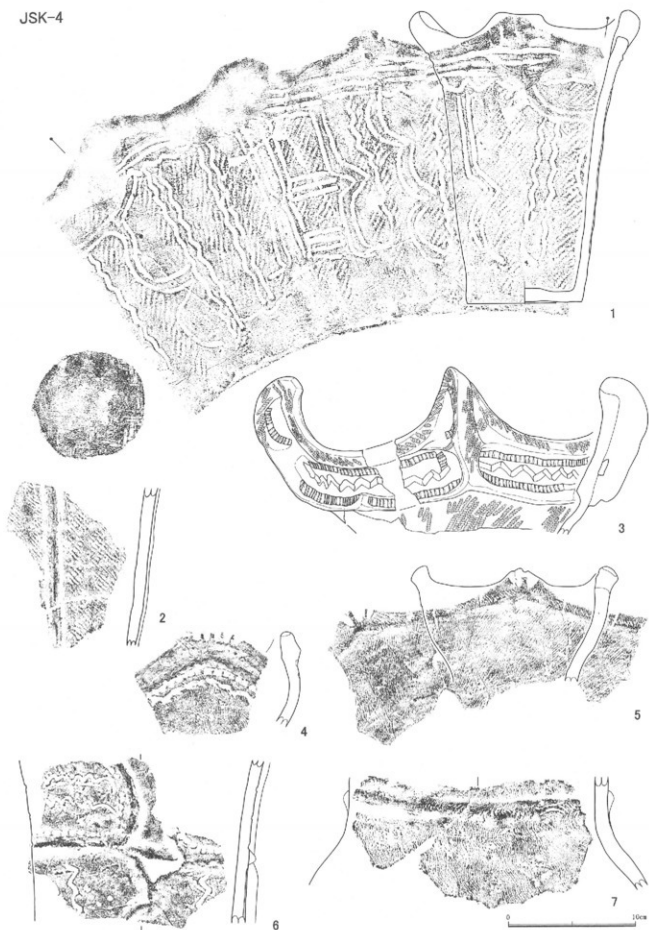


第18图 JSK-2·3出土土器

第9表 縄文土器観察表(6)

遺構名	採函番号	図版番号	型式名	口径	器高	底径	器形・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
JSK-4	19-5	12-6		(16.5)			上半が大きく膨らむ波状口縁深鉢で、胴下半を欠損する。波頂にスリットがあり、口唇が肥厚し稜をもつ。器全面に縦方向に施文された縄文(L)。	長石・細かい金雲母がめだつ。	良好	褐色	
	19-6	12-5	阿玉台皿式				円筒状をした深鉢の胴部。稜のある太い隆帯を横位およびX状に貼付し、区画内に押し引きによる列点文と蛇行沈線が施されている。外面は粗い器面調整だが、内面は丁寧で平滑。	長石・その他の砂礫が多く、金雲母は含まない。	良好	褐色	
	19-7	12-7	阿玉台皿式				頸部に隆帯が周る人形の壺。全面に樽筒状文が縦方向に施されている。頸部径20.8cm。熱熱による肌荒れがみられる。	長石・細かい金雲母がめだつ。	普通	小褐色	
	20-1	12-11					山形の波状口縁を呈する深鉢で、波頂部で肥厚、内面で稜をもつ。器全体に縄文RLが施文されている。	長石・細かい金雲母がめだつ。	普通	褐色	
	20-2	12-12			<8.2>		円筒形をした深鉢で口縁側を欠く。器全面に、末端を結節した縄文原体RLを垂直に回転施文している。原体は長さ4.0cmでこの幅は、人差し指・中指・薬指3本分の幅長に相当する。	細かい金雲母を多量、細かい長石等を少量含む。	良好	黒褐色	
	20-3	12-9				10.0	器面調整、胎土の具合、色調などから6と同胴体であろう。	長石・その他の砂礫が多く、金雲母を含まない。	良好	褐色	
	20-4	12-13				11.0	器面調整が丁寧な無文の底辺部であるが、内面は長石などの砂粒がそのまま露呈する。底面に網代痕を抹消した痕跡あり。	大粒の長石などを多量に含む。	普通	褐色	
	20-5	12-10					大形の無文浅鉢。波状をなすが、左側よりも右側のスロープが小さく急なので、山は2山の単位になるようだ。内面は平滑に器面調整されており、段状に稜をなす。	長石・細かい金雲母を含む。	良好	褐色	
	20-6	12-8					無文平縁の浅鉢。内面は平滑に器面調整されており、段状に稜をなす。	細かい長石・金雲母を含む。	良好	褐色	
JSK-5	20-7	13-1		18.0	(22.5)	11.6	口縁側が大きく膨らみ、体部が筒状をなす深鉢。口唇部が小さく突き出す。器肌は荒れもあり一部無文にみえたが、拓本により全面に縄文(RL)の施文を確認できた。縄文は同じ原体の方向を違えて施文して、羽状のようにみせている。	肌理の粗い金雲母および砂礫を多量に含む。	普通	橙褐色	

JSK-4



第19圖 JSK-4出土土器

第10表 縄文土器観察表(7)

遺構名	採回 番号	図版 番号	型式 名	口径	髑高	底径	器形・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備 考
ISK-4	20-8	13-2					内湾する波状口縁を呈する深鉢。舟手で、特に内面の器面調整が丁寧なつくり。縄文R.Lを地文にして角押文・鋸歯状沈線などが描かれている。	細かい長石・金雲母を含む。	良好	褐色	
	20-9	13-3	阿玉台皿式				分厚い器壁の深鉢形。氣地に棒状工具による押しきと波状沈線による施文。異色の土器で、他地域で製作され搬入されたのであろう。	長石・細かい金雲母を多量に含む。	普通	灰褐色	
	20-10	13-4	大木8a式				11と同個体の深鉢の口径で、波頂下に円孔がある。口縁に沿って3本の角ばった深い沈線が施されており、一部に押しきされた角押文の結節がみとめられる。また下縁には鋸歯状沈線が施されている。	長石等の砂粒を多量に含む。	普通	褐色	
	20-11	13-5					10と同個体の深鉢の器部。縄文R.Lを地文にして竹管状工具による押しき、鋸歯状の沈線が施されている。	長石等の砂粒を多量に含む。	普通	褐色	
	20-12	13-6					内径3cmに径があり外反する短文の深鉢。外面の器面調整は粗いが、内面は丁寧で平滑。	長石等の大粒の砂粒、細かい金雲母を含む。	普通	褐色	

(山崎裕了)

## 石器 (第21図・図版13)

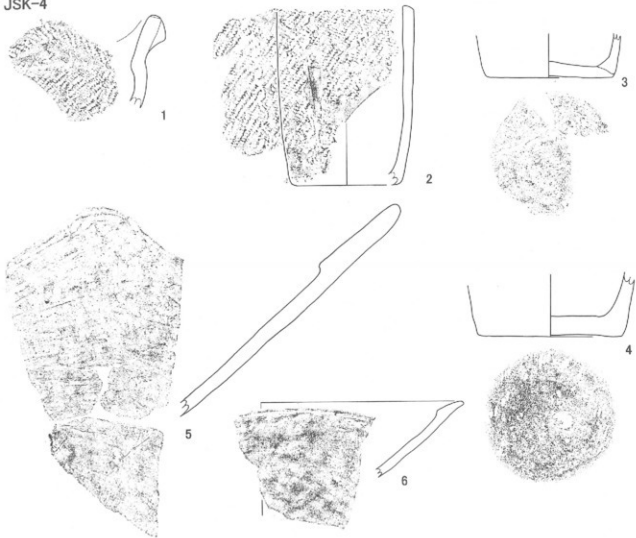
石器の類が7点だけ出土した。遺構・遺物の内容から見て石器の出土は必ずしも多くはないが、このうち4点は磨石の類で、同じ個体に磨痕とともに擦痕や敲打痕もあり、複数の機能をもつと考えられる。磨石は堅果類などの加工用具などとされているが、土掘り具とされる打製石斧などを加味するといっそう植物質食料に傾きがみられそうである。これに対して石鏃や石槍、石匙などの狩猟解体関係と思われる用具は、わずかにチャートの剥片石器が1点だけで、動物質食料の占める比重は低かったようである。

1は舟手で小形の素材を敲打により調整した撥形の打製石斧と思われるが、絹雲母片岩の性状により風化がいちじるしく、加工痕を判別しがたい。図で刃部とした側が頭部側よりも厚みをもっているのも、或いは天地が逆で、鏡様の石器とするべきかも知れない。

2は石英の円盤を素材とした、楕円形で厚みを持つ大形の磨石。片面は甲高で、全体に使用に関わると考えられる磨りが顕著で、石肌が光沢をもっている。もう片面の方は扁平で、とりたてて擦痕は認められず、中央部に敲打による窪みが認められる。また両側縁も磨る用途であったようで多少ざらついているが、硬質の石材のためか面をなすにいたっていない。かなり大形で重量もあり手軽に使用するのに抵抗を覚えるが、表面の光沢痕は相当に使い込んだ結果であろう。ただ当初に形を整えるために光沢ができたというのではなく、皮革をなめすような作業が繰り返されたためではないだろうか。

3は本来、長楕円形の磨石であったものが、使用により半ばで折損したらしい。表裏面ともによく磨かれて

JSK-4

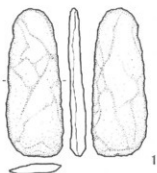


JSK-5

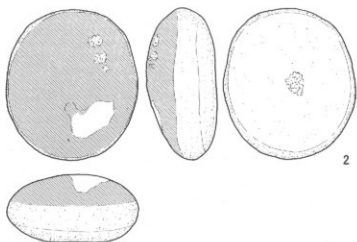


第20圖 JSK-4・5出土土器

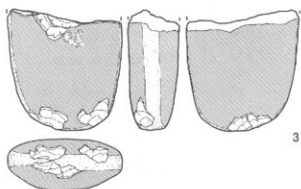
JSI-1



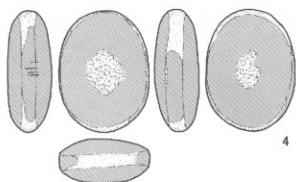
1



2

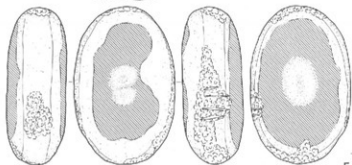


3



4

JSI-2



5

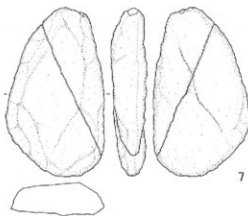


SX-1



6

JSK-3



7

磨り面

0 10cm

第21図 JSI-1・2、SX-1、JSK-3出土石器

平滑であるが、この場合は形を整えるための磨きというよりも使用の結果であろう。周縁には敲打痕と擦痕がみられる。両側縁も擦痕がいちじるしく、下端面は敲打とおそらく使用時の摩擦熱によるであろう、変色と礫肌の荒れがめだつ。

4は手頃な楕円礫を素材とした磨石。両面ともよく磨かれて整形されたうえに、握りやすいように両面中央を軽く敲打している。左右側縁には敲打痕と擦痕が顕著で、この部位が主要な使用面となっている。

5は表面の中央に2箇所、裏面の1箇所に浅いくぼみを持つ楕円形の凹石で、両面とも磨かれている。上下両側面には敲打痕が見られ、この部位が主要な使用面であつたらしい。すると両面中央のくぼみは、使用痕というより石器を握るときの指の掛かりのたけの調整のようである。

6はチャートの二次加工剥片で、側縁部を刃部として使用している。平面は不整形で、表面に自然面を残している。

7は断面が台形を呈する厚手の素材で、打製石斧の未製品のようにも思われるが、1と同様に石材の性状のためか風化が激しく、加工痕が判別しがたい。あるいはまったく違う用途の石器なのかも知れない。

(小野真美)

第11表 石器観察表

遺構名	挿図番号	図版番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重量	遺存度
JSI-1	21-1	13-7	打製石斧?	絹雲母片岩	11.7	4.4	1.2	95.0	完形
	21-2	13-8	磨石	石英	12	10.5	5.45	1410.5	完形
	21-3	13-9	磨石	花崗閃緑岩	9.65	7.1	3.5	441.0	完形
	21-4	13-10	磨石	硬砂岩	(9.5)	9.0	4.0	392.0	1/2
JSI-2	21-5	13-11	凹石	砂岩	12.5	8.0	4.9	629.0	完形
SX-1	21-6	13-12	二次加工剥片	チャート	3.45	3.0	0.8	4.1	完形
JSK-3	21-7	13-13	打製石斧?	絹雲母片岩	13.3	7.7	2.7	402.0	完形



## 2. 古墳時代の遺構・遺物 (第23図)

### (1) 古墳・土器

発掘調査で検出された古墳時代関係の遺構としては、古墳の周溝および埋葬主体部の石棺(SX-3)が4と破損した石棺の残片と思われる礫群(SS-1)がある。大方、ローム面まで削平されていたため、遺物としては周溝から坏2個体分が出土しただけである。

#### SX-1 (第24図・図版4)

本溝は、調査区中央やや南東寄りのC-1~E-3グリッドに位置する。検出面が縄文遺構の検出面と同じくほぼローム土上面であるため、古墳が構築された墳丘だけでなく主体部なども大方は削平されたようである。平面形状は径約6.5mの環状を呈するが、南東部は開いている。また、仔細に観察すると土坑状の溝を3条連ねたような状態である。溝自体の規模は、全長約20m、幅0.5~0.9m、確認面からの深さは約0.2mを測る。

溝の底面は凹凸があり、壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、断面形状は皿状を呈する。覆土は、部分的に異なるものの全体としては2ないし3層に区分され、いわゆるレンズ状に堆積している。

本溝は、規模・形状および覆土土質から、善九郎古墳群の一部を構成する古墳の周溝であろう。上部はかなり削平されており、石棺などは検出されていないが、周溝に囲まれた内側から絹雲母片岩の礫(SS-1)が数点まとまって検出されている。また、周溝の内側に検出された、縄文中期住居跡の南西が柄鏡状に張り出しているが、中期末の時期ではないから住居の付属施設として不自然である。あるいはこの土坑上の施設が古墳の埋葬施設で、先の礫群もここから抜き取られた石棺の残塊ではなかったろうか……。

なお、溝中からは縄文土器片のみが数点出土している。

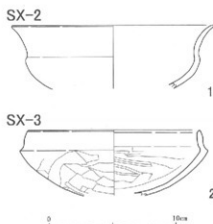
#### SX-2 (第25図・図版4)

本溝は、調査区南西部のD-1~F-1グリッドに位置する。調査区西壁の中央やや南寄りから南西隅の壁面にかけて走行しているため、南北両端は調査区外へ延びている。確認範囲での平面形状は、西に湾曲した弓状を呈する。規模は、全長11.5m、溝幅1.7~2.3m、確認面からの深さは全体としては0.5m程だが、調査区南壁際は大きく掘り込まれた状態で深さ0.8mを測る。

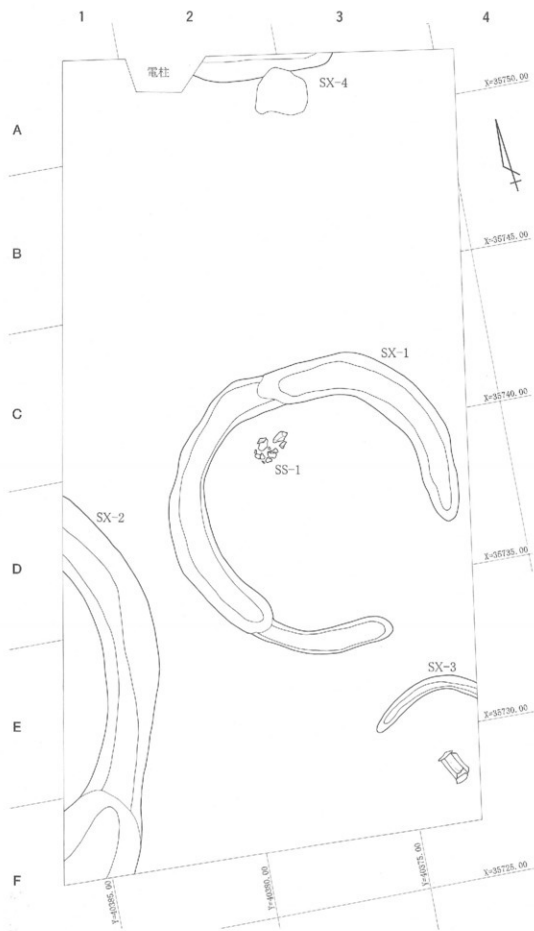
底面は、全体的に凹凸が多く中央部はやや窪んだ状態で、また南側は前述のように急激に掘り込まれている。壁は、底面から傾斜して立ち上がるが、全体的に東壁の方が傾斜は緩やかになっている。覆土は3層に区分され、ほぼレンズ状に堆積している。

本溝は、大半が調査区外であるため全容は把握できないが、西側に主体部を持った古墳の周溝の一部と思われる。

遺物は、古墳時代の坏片(第22図1)と縄文土器片が出土した。

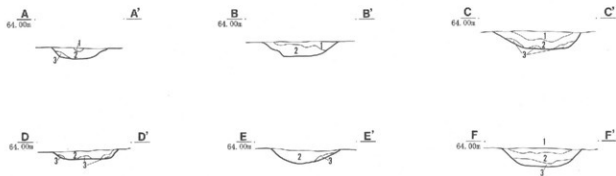
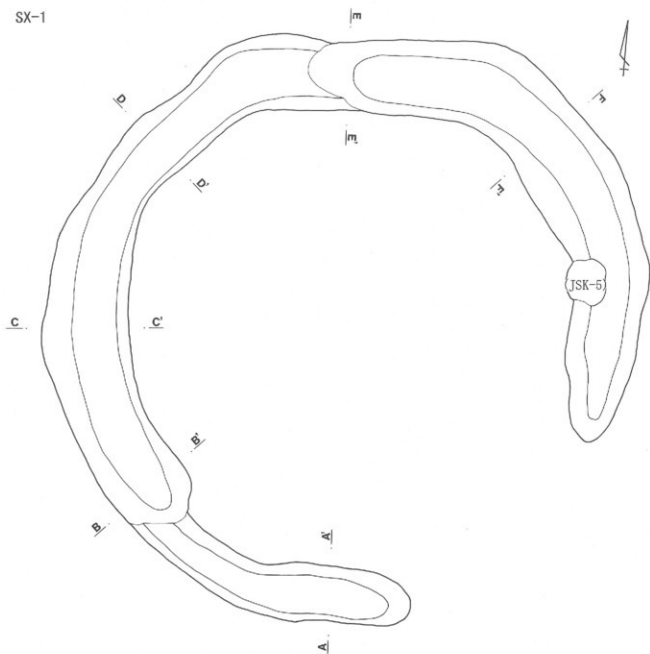


第22図 SX-2・3出土土器



第23図 古墳時代の遺構配置図 (1/120)

SX-1



- 1. 黒褐色土 粘性しまり共に弱い。
- 2. 暗褐色土 黒褐色土粒子多量含む、粘性しまり共にやや弱い。
- 3. 褐色土 粘性しまり共にやや強い。



第24図 SX-1遺構図 (1/60)

### SX-3 (第26図・図版5)

周溝部分 本溝は、調査区南東部のE-3グリッドに位置する。東側は調査区外へ続いていて全容が把握できないが、確認範囲での平面形状は、南側に湾曲した弓状を呈する。規模は、全長3.8m、溝幅0.45m、確認面からの深さは0.2mを測る。

底面はわずかに幅0.15m程しか残っておらず、所々に凹凸がある。壁は、両面とも底面から傾斜して立ち上がっている。覆土は、西側では2層に分かれ、調査区東壁では黒褐色の単一土層であった。

遺物は、同一個体の坏片(第22図2)が出土した。

石棺部分 調査区南東隅のF-3グリッドに位置する。蓋部分は消失しているが、底面に1枚、側面に4枚の板石(絹雲母片岩)を組み合わせた箱状の石棺であり、周溝のほぼ中央部に長軸を南北方向にして構築されている。規模は、長軸1.1m、短軸0.54mで底面までの深さ0.3m程を測る小形の石棺である。覆土は、やや締まりの弱い黒褐色土主体のほぼ単一層で、棺内に遺物はなかった。

### SX-4 (第26図・図版5)

本遺構は、調査区北壁際のA-2・3グリッドに位置する。北側と西側が調査区外であるため全容は把握できないが、確認範囲では東西に細長い土坑ないし溝のような構造を呈する。規模は、長軸4.4m、短軸0.8m 確認面からの深さは0.5mを測る。

底面は、ほぼ平坦に構築されており、壁はやや緩やかな傾斜で立ち上がっている。覆土は2層に分かれるが、下層は確認面から底面まで流れ込んだような堆積状態を呈する。

本遺構は、前述のように確認範囲が僅かであるため遺構としての性格は不明だが、南側に検出されているSX-1~3と同じく古墳の周溝である可能性が考えられる。

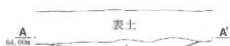
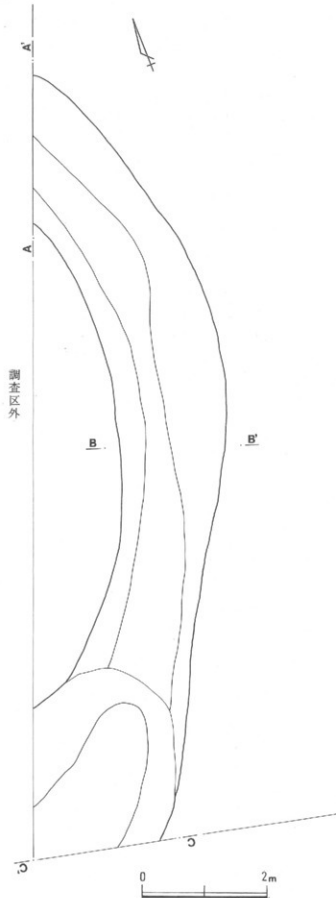
### SS-1 (第25図・図版5)

本遺構は、調査区中央部のC-2グリッドに位置する。拳大から人頭大ほどの礫が12点程まとまった状態で検出されている。礫の配置に規則性は窺えず、また周囲に掘り込んだような構造もない。

検出位置がSX-1の内側であることや、礫の中にはSX-3の石棺と同じ雲母片岩の石材が見られるので、SX-1の主体部をなす石棺の残塊の可能性もある。

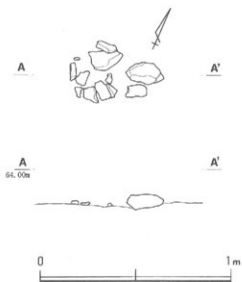
(伊藤)

SX-2



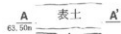
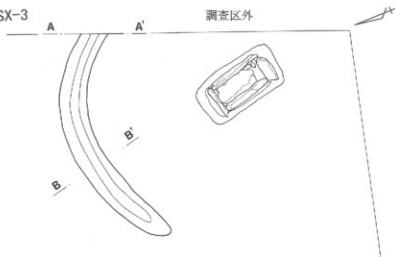
1. 黒褐色土 赤色スクリア層を含む、粘性しまり共に弱い。
2. 黒褐色土 暗褐色土粒子多量含む、粘性弱く、ややしまっている。
3. 暗褐色土 コーム粒多量含む、粘性しまり共にやや強い。

SS-1

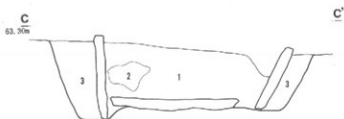
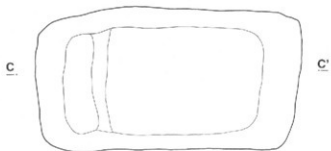
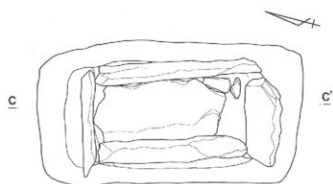


第25図 SX-2、SS-1遺構図 (1/20・1/60)

SX-3



1. 黒褐色土 褐色土粒少量含む、粘性しまり共に弱い。  
 2. 褐色土 粘性しまり共にやや強い。



1. 暗褐色土 黒褐色土粒少量含む、粘性しまり共に弱い。  
 2. 暗黄褐色土 ロームブロック多量含む、粘性しまり共に弱い。  
 3. 暗褐色土 ローム粒少量含む、粘性しまり共にやや強い。



SX-4



1. 黒褐色土 粘性しまり共に弱い。  
 2. 黄褐色土 粘性やや強く、しまりやや強い。



第26図 SX-3・4遺構図 (1/20・1/60)

### Ⅲ. 考 察

本遺跡はこれまで善九郎古墳群として知られていたが、此の度の穴戸ヒルズカントリークラブのクラブハウスに通じるアプローチ道路の建設に伴い発掘調査が行われた。その結果、古墳が4基分と縄文時代中期中葉の住居跡2軒、袋状土坑5基などが検出され、多大な成果を得ることができた。

前章まで、調査の概要および出土した遺物の観察を行ってきたが、ここでは縄文時代と古墳について、歴史的にどのように位置づけられるのかを検討してみたい。

#### 1. 縄文中期の集落について

##### 遺跡について (第27回)

友部町史(1990)によれば、町内には縄文時代の遺跡が36ヶ所ある。このうち27ヶ所は他の時期とも複合する遺跡もあるが、中期に属するという。遺跡は多く、澗沼流域をはじめ澗沼前川、澗沼川の支流・枝折川の沿岸及びこれらの河川に注ぎこむ小川の洪積台地に分布しており、代表的な遺跡として、柏井地区の柏井遺跡、住吉地区の住吉遺跡、下市原地区の松崎台遺跡、小原地区の小原神社周辺遺跡などがあげられている。さらに後期堀之内式と加曾利EⅡ式が出土しているという(掲載写真は加曾利EⅠ式が主体で堀之内式は見当たらないが……)。善九郎遺跡もそのひとつに考えられる。

善九郎古墳群は、カントリークラブハウスの裏側の文谷をはさんだ北側の畑地と山林にあり、善九郎遺跡とは地形が連続していないところから別遺跡と見なされる。したがって、縄文中期集落は善九郎古墳群の範囲に複合して広がっていることを確認しておきたい。

集落の時期は、出土した土器型式により編年的な位置づけがなされる。それによれば本遺跡からは2軒の住居跡と5基の袋状土坑が検出され、土器などの遺物はいずれも遺構中から出土した。それらの土器は当時の日常什器類といえるが、使用により破損した土器などがその都度廃棄されたような出方であり、中期中葉でも多少の年代幅をもっている。

土器型式では東関東に分布する阿玉台式(Ⅲ・Ⅳ式)をはじめ、東北南部から栃木県方面に分布する大木8a式、それに僅かではあるが西関東方面に分布する勝坂式の系統が混じる。これら土器型式の違いというのは、それぞれの地域に居住する集団との何らかの交流関係を示唆する。これらのほかに無文をはじめ、縄文、或いは櫛歯状の施文が全面に及ぶ土器も多い。これら土器の型式名が判然としないため、一覧表の型式名欄を空白のまま残した土器も多いが、それらはまさしく当地で製作された在地的な深鉢であるといえる。

茨城県の中期中葉の土器型式を見ると、筑波山一霞ヶ浦ラインを境にして北東側と南西側では土器型式に分布差があるという(塚本 2000)。友部町は言うまでもなくこの北側範囲にあり、中鉢式土器の分布は及んでいない。その北東側の中期中葉には、日立市諏訪遺跡で良好な出土をした諏訪式或いは諏訪タイプとされる在地的な一群の土器がある(鈴木 1980)。阿玉台式に対応するように4段階からなり、ⅠからⅡ段階は在地的色が濃く表出するが、ⅢからⅣ段階につれて薄まるようである(海老沢 1984)。

本遺跡は阿玉台Ⅲ式からⅣ式の時期に営まれており、諏訪式Ⅲ・Ⅳ段階に相当しようから、在地の土器様相は、地元の諏訪タイプを中心にしながら阿玉台式、大木式、勝坂式などが複雑にからみ合っている。

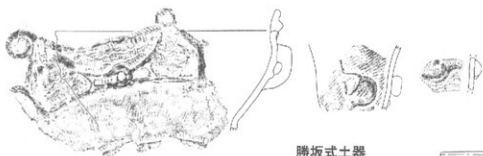
そうした不安定な土器様相がやがて東北南半の大木式的な様相の強い加曾利EⅠ式に統一されていく。



阿玉台Ⅲ・Ⅳ式土器



大木8a式土器



勝坂式土器



在地系土器

第27図 本遺跡出土の土器型式





- |               |                |                     |
|---------------|----------------|---------------------|
| 三好            | 東海             | 東海                  |
| 1.日立市上の代遺跡    | 12.宇野宮市御城田遺跡   | 22.船橋市高松水戸遺跡        |
| 2.日立市加勢遺跡     | 13.高沢町石神遺跡     | 23.千春市蔵立遺跡          |
| 3.笠間市西田遺跡     | 14.東横沢町上の原遺跡   | 24.半原市島越込貝塚         |
| 4.石岡市東大橋原遺跡   | 予備集            | 25.半原氏草刈遺跡          |
| 5.石岡市大作台遺跡    | 15.柏台中山新田Ⅰ・Ⅱ遺跡 | 地玉集                 |
| 6.つくば市下広岡遺跡   | 16.柏市望人家遺跡     | 26.稲川市高井遺跡          |
| 7.牛久市水塚遺跡     | 17.柏市水砂遺跡      | 東宮集                 |
| 8.谷和原村大谷津A遺跡  | 18.大栄町稲荷山遺跡    | 27.日の出町岳の上遺跡        |
| 9.取手市西方貝塚     | 19.北原市織花遺跡     | 28.八王子市富田遺跡         |
| 10.茨城町小山台古墳貝塚 | 20.松戸市子物碑水貝塚   | 29.多摩ニュータウンNo.44 遺跡 |
| 11.勝九郎古墳群     | 21.船橋市海老ヶ作貝塚   | 神奈川集                |
|               |                | 30.横沢市織田遺跡          |

第28図 関東地方における有段式堅穴遺構分布(茨城県教育財団1996)原因に追補

### 「二段掘込みの住居跡」について(第28・29・30図、第12表)

本遺跡からは2軒の住居跡が検出された。このうちJ S I - 2号住居跡は、外枠の掘込みの内側に小形の掘込みがすっぽり収まる特異な構造をしており、「二段掘込み構造の住居址」(鈴木 1980)、「二段床構造住居址」(今橋 1985)、「有段式堅穴遺構」(中野 1985)などと呼ばれてきた住居形態である。本報告では「二段掘込みの住居跡」とする。

茨城県教育財団の縄文時代研究班は、平成6年度に茨城県下の中期前半の住居跡を集成して、五領ヶ台式期以降、阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期にいたる住居形態の変遷を見通した。さらに平成7年度にはこの形態の住居跡を「有段式堅穴遺構」として、関東各地に事例を渉猟して分布と時期、系統および変遷を探り、大概の見通しが得られるようになった。上記2篇の研究成果に照らしてみると、まさに当該住居跡の営まれた本遺跡の社会的な状況が看取されてくるのである。

まず「有段式堅穴遺構」(二段掘込みの住居跡)が発見された遺跡と住居形態の関係は次のようである。

第12表 茨城県の有段式竪穴遺構一覽(茨城県教育財団1996)を部分抽出し追補

遺跡番号	遺跡名	住居番号	主軸方向	平面図	規模		住穴数	床	盛土	炉	時期	分類	
					長径×短径 (m)	高さ (cm)							
2	諏訪	1		上面	隅丸方形	4.12×4.82		2	硬い	無	無	阿玉台Ⅲ～Ⅳ	F
				下面	方形	2.32×2.84	12~15	4 (4)	硬い	無			
2	諏訪	2		上面	六角形	一辺2~2.5						阿玉台Ⅲ	F
				下面	方形	2.2×2.7	36	6		無	無		
4	東大槻原	DJ-1		上面	隅丸方形	4.1×3.25	20~35	5		無	無	阿玉台Ⅲ	C
				下面	方形	2.15×2.15	30	7					
5	大作台	2		上面	隅丸方形	4.1×4.5	10~15			無	無	阿玉台Ⅲ	E2
				下面	隅丸方形	2.6×2.6	30			有			
8	大谷津A	65	N6° E	上面	隅丸長方形	6.06×4.75	21~24	6		無	無	阿玉台Ⅲ	E1
				下面	長方形						無		
1	上の台	3		上面	長方形	10.0×5.7		9		有	有	阿玉台Ⅳ	E2
				下面	長方形	6.8×3.8	60	多数 (4)	硬い				
5	大作台	1		上面	隅丸方形	4.9×4.6	30~40	7	硬い	有	無	阿玉台Ⅳ	D
				下面	方形	3.0×3.0	20	9		無	無		
4	下広岡	4	N67° W	上面	隅丸方形	6.2×5.3	38~55	4 (4)	硬い	有	無	阿玉台Ⅳ	E2
				下面	隅丸方形	4.20×3.50	35~	12 (4)	硬い	無			
4	下広岡	39	N62° W	上面	隅丸方形	10.32×6.49	23~26	9 (6)		有	無	阿玉台Ⅳ	E2
				下面	隅丸方形	7.95×4.95	~27	13 (6)	硬い	有			
4	下広岡	81	N64° W	上面	不整形台形	6.45×5.3		多数	硬い	有	無	阿玉台Ⅳ	R2
				下面	不整形台形			多数 (5)	硬い	有			
9	西方長塚	B1	西北西	上面	台形	4.00×3.60		4		無	無	阿玉台Ⅳ	E1
				下面	方形	2.40×2.40	~20			硬い			
11	第九部 古墳群	JS1-2	東西	上面	長方形	3.20×4.20	20			無	無	阿玉台Ⅲ	E1
				下面	長方形	3.70×2.95	60	5	硬い				

五領ヶ台式期・・・・前期住居文化の継承期 (1遺跡 1軒)

阿玉台Ⅰa~Ⅰb式期・・・阿玉台式住居文化の確立期 (1遺跡 10軒)

阿玉台Ⅰb~Ⅱ式期・・・阿玉台式住居文化の盛行・多用 (4遺跡 35軒)

阿玉台Ⅱ~Ⅲ式期・・・阿玉台式住居文化の動揺期 (4遺跡 19軒)

阿玉台Ⅲ~Ⅳ式期・・・阿玉台式住居文化の激変期 (7遺跡 15軒)

本遺跡は阿玉台Ⅲ~Ⅳ期であり、激変期に相当する。住居跡の検出された遺跡が前代よりも2倍近くに増加することから激変期とされたようである。つまり住居跡軒数ではむしろ減少しながら遺跡が倍増したのは、新たな居住地を求めて集落が分散した社会的な状況にある。住居形態もそれまで円形住居系統が優勢であったものが、方形住居系統が前代の26%から67%に大きく逆転し、規模も拡大化(5m以上)する。こうした大きな変化の原因として、「二段掘込みの住居跡」の抬頭があるという。集落の分家と住居形態の相関が窺えよう。

一方土器型式では、阿玉台Ⅳ式の土器になると、阿玉台Ⅰb~Ⅱ式土器の色合いも諏訪タイプの色合いも薄くなり、勝坂式や大木式系統を伴う割合が高くなっていく。阿玉台式土器文化が崩壊して行く過程と軌を一にするように、中期前半の住居形態も「二段掘込みの住居跡」が盛行してくる(第12表参照)。

それでは「二段掘込みの住居跡」(「有段式竪穴遺跡」)とはどのような性格の住居なのか、その出現と系統・変遷、分布が問題になってくる。

縄文時代研究班によれば、平成7年度の時点で、有段式竪穴遺構（住居としての機能に問題はないと考えられるが、一般的な竪穴住居跡と同様な機能であったかは疑問の余地を残すということから「有段式竪穴遺構」の名称を用いている）は、関東6都県で30遺跡が管見に上がっており、その分布の中心は茨城県南部から千葉県北西部にあり、全体の3分の2に近い。時期的分布を見ると、阿玉台Ⅰb～Ⅱ式期に千葉県北西部で出現したようである。そして阿玉台Ⅲ～加曾利EⅠ式期に最も検出例が増加するとともに、同辺地区にも拡散し、やがて加曾利EⅡ～Ⅲ式期になると終焉を迎えるという。

茨城県内では、10遺跡21例が数えられている。その時期的な内訳は、阿玉台Ⅰb式期が1例、阿玉台Ⅲ～Ⅳ式期が5例、阿玉台Ⅳ式期が6例、阿玉台末～加曾利EⅠ式期が4例、加曾利EⅠ式期が2例、阿玉台末～加曾利EⅡ式期が3例となっている。つまり二段掘込みの住居跡は、阿玉台Ⅲ式からⅣ式期の発見例が5割以上もの高率にあり、当該期に最も盛行した住居形態といえる。

それでは二段掘込みの住居跡の系統と変遷はどうであろうか。分類の基準となる属性としては、平面形、柱穴の配列、壁溝及び仕切り溝の有無により、また平面形と柱穴の配列によりA類からF類に分類され、E類については壁高および仕切り溝の有無により、さらに3種に細分されている。すなわち次のような分類基準であり、その典型的な住居実測図（第29図）が示されている。

A類 平面形は円形を基調とし、床面中央に1か所の主柱穴を持つもの。

B類 平面形は方形を基調とし、床面中央に1か所の主柱穴を持つもの。

C類 平面形は半円形を基調とし、上位床面が「コ」の字状を呈するもの。

D類 平面形は方形・長方形を基調とし、主柱穴を持たないもの。

E類 平面形は方形・長方形を基調とし、4か所あるいは6か所の主柱穴を持つもの。

1種 壁溝のないもの

2種 壁溝のあるもの

3種 仕切り溝のあるもの

F類 平面形は楕円形を基調とし、4か所あるいは6か所の主柱穴を持つもの。

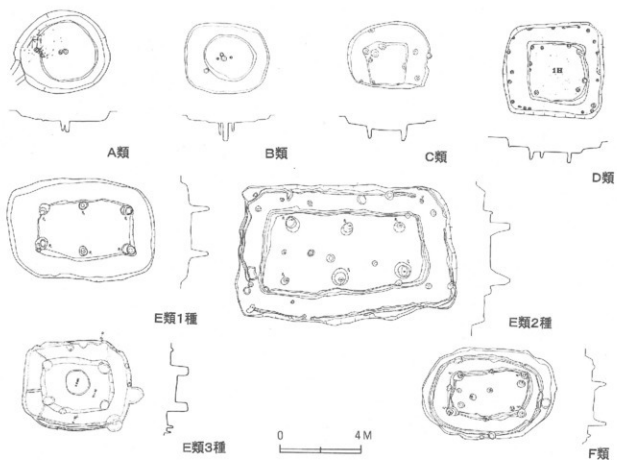
次に系統変遷を見ると、阿玉台Ⅱ式期には資料が少ないことから、Ⅰ期（阿玉台Ⅰb式期）、Ⅱ期（阿玉台Ⅲ～加曾利EⅠ式期）、Ⅲ期（加曾利EⅡ～Ⅲ式期）に大きく分けられた。この中でⅠ期からⅡ期にかけて、A・B類からE・F類に転換することが大きな画期とされている（第30図）。

本遺跡で検出されたJ SⅠ-2住居跡はⅡ期で、形態分類ではE類1種になる。Ⅱ期の特徴的な属性としては、下位掘込みの床面壁際に4ヶ所あるいは6カ所（長方形プランの場合）の主柱穴をもつものという。J SⅠ-2住居跡は、まさに時期も構造も上記分類にピッタリと適合する。

#### 住居跡と袋状土坑の関係（第31図）

調査した範囲は400m<sup>2</sup>足らずの限られた面積であったが、ここから縄文時代中期中葉の住居跡2軒分とそれに付随すると考えられる袋状土坑5基が検出された。竪穴住居跡が検出された背景には単に季節的な露営地ではなく、彼ら縄文人が、長期的な展望の下にこの場所を生活の拠点としたことである。前代の阿玉台Ⅱ式期で固定していた集落が、阿玉台Ⅲ式からⅣ式期にはほぼ倍増する傾向が窺えたが、まさに本遺跡は、本集落から移住してきた分村なのである。

この集落で年間居住しようとするれば、生活の糧となる食糧確保の手段とともに、冬季をのりきる食料の備蓄が必要である。袋状土坑（フラスコ状土坑）は、植物質食料を低温度のまま備蓄する貯蔵施設と考えられている。秋に集中して確保される食料とすると、ドングリ、クリ、クルミ、トチなどの堅果類がまず考えられるが、構造のうえではむしろイモ類や球根類の貯蔵に最も適しい施設と考える。縄文時代にサトイモが栽培されていたという確証はないが、仮にイモ類を貯蔵の対象とした場合、室いっぱいまで貯蔵はしない。半



第29圖 有段式豎穴遺構形態分類 (茨城県教育財団 1996) 原圖

	阿玉台 I a	I b	II	III	IV	加曾利 E I	E II	E III
A類		■						
B類		■						
C類					■			
D類					■			
E類1種					■	■		
E類2種					■	■		
E類3種					■	■		
F類					■	■	■	

第30圖 有段式豎穴遺構形態分類別消長 (茨城県教育財団 1996) 原圖

ばまで収容したとしてもイモの息する炭酸ガスの熱により、上側のイモの腐敗は避けられず、病菌が発生する恐れもある。このような不都合もあり、袋状土坑を継続的に使用することはなかったろう。土坑の形態をみるとJSK-1とJSK-2は底面が円形、JSK-3とJSK-4はより大形の小判形の底面で共通する。するとJSK-1とJSK-4、JSK-2とJSK-3で1単位を構成し、隔年置きにでも使用したのかもしれない。

それはともかく、出土遺物を通してこの袋状土坑と住居跡の関わりを見ると、JSI-1住居跡とJSK-1土坑からは同じ個体の土器破片が出土したことから、同時併存が窺える。このような出土の在り方がJSK-1とJSK-2の間、JSK-4とJSK-5の間にも窺える(第31図)。破損した土器を片付けるために使用廃止した遺構の窪みに乗せたか、或いは遺構を廃するにあたり、御霊送りとして生活用具が破壊され投棄されたのかも知れない。この場合、JSK-3とJSK-4は、構築時のフラスコ形をした構造が損なわれていることで共通する。自然に崩壊したというよりも多分に人為的に出入り口の縦坑部を掘り崩した形跡を考える必要もあろう。5基の袋状遺構はいずれJSI-1の北側に偏っており、相互の遺構に連続する密接不離なる関係が窺えよう。

一方、JSI-2住居跡の方には調査区境に在るためか、袋状土坑は見られない。或いは調査区外に認められるのであろうか……。

次に問題になるのはJSI-1住居跡とJSI-2住居跡の関係である。調査範囲が限られていて未調査区の状況が不明のままに考察するのも危険であるが、大まかには次の三通りの見方ができよう。

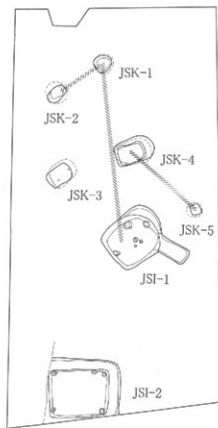
- ア. 2軒の住居跡は、1軒の住居が建て替えられた結果であり、時間的な違いを示す
- イ. 住居構造の違いは、血縁集団が異なると同時に共同生活をした2家族の住居を示す
- ウ. 住居規模に大小の違いがあるので、2軒の住居で1単位をなす1家族の居住形態を示す

アの場合、2軒の住居跡から出土した土器に時間差が認められるか否かが鍵になる。するとJSI-1住居からは阿玉台Ⅲ式とⅣ式が、JSI-2住居跡からは阿玉台Ⅲ式ではなくⅣ式が出土している。その意味ではJSI-1住居跡が先行する可能性があるが、いずれもまともな欠け、画然とは区別し難い。

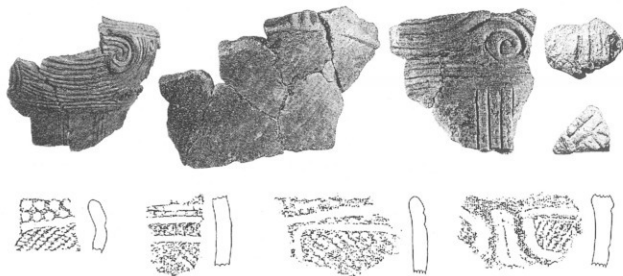
イの場合、JSI-1住居の構造が、二段掘込みの住居跡であったのか否か、はっきりしない(上段の掘込みが浅いため、削平された可能性も考えられる)が、下段の掘込みに見られる柱穴の配置は壁際の中央に配置されていて、JSI-2住居の壁際隔の配置と異なっている。2軒の住居の規模にも格差があるが、下段規模ではJSI-2住居がいくぶん大きい。出自集団の違いが住居構造に反映されたものとしたら、2軒の住居は同時併存したもので、双分制社会の一面を示唆しているのかも知れない。

ウの場合、JSI-2住居跡上段の面積は21.8㎡(520cm×420cm)、これに対してJSI-1住居跡の上段と下段の関係を隅丸方形住居の建直しと見ると10㎡弱となり、住居規模に2倍の格差がある。

縄文時代中期の住居構成は2棟で1組と見る研究(水野1969)もある。筆者もニュータウンNo446遺跡の住居跡群を分析したところ、確かに大小2軒の住居で1家族単位を構成すると考えた



第31図 同一個体土器遺構関連図



第32図 善九郎遺跡出土土器(友部町 1990)

(安孫子)。大の住居が主家とすると、小の住居は従家か小屋のような関係にあるのかも知れない。この2軒を1組とすると、袋状土坑群はJ S I - 2住居跡も含めた2軒分の食料備蓄施設という解釈に傾く。

以上、3通りの見方を要約してみたが、筆者としてはウ案を採用したいところである。

#### 集落の復元に向けて

そこで次に、集落はどの程度の広がりをもつであろうかを推測してみる。当該調査区を周囲の地形に照らしてみた場合、調査区のすぐ北側を東西に横断する道路が走っている。標高63m程で、緩やかな丘陵の屋根筋にあたり、ここからクラブハウスのある北側にゆるく傾斜する。そして屋根筋をとりまく標高60mラインと西側及び東側に仄入する小さな支谷までを境とすると、本調査区を中心とする東西200m、南北100mの範囲に集落が広がっていた可能性がある。この範囲に2軒の住居で1組となる何単位かの家族が、屋根筋をとりまくように配置されていたのかも知れない。本調査区で住居は外側に、貯蔵施設は内側に在るのも、環状集落の配置として理に適っている。

ここでは数家族で社会的な共同体を構成していたことであろう。換言すれば、2軒の住居跡の居住者だけが孤立的に生活していたものではないということ。傍証として、J S K - 2土坑から出土した台状土製品(台状土製品、器台形土器、盤状台形土器などの異名もある)に着目したい。特殊な遺物のためにいろいろの用途が想定されたが、当初にこの土製品に着目した八幡一郎は、土器づくり用の作業台と考えた。側面にあけられた孔は、これに指をかけて回すもので、一種の回転台と解したのであった(八幡 1963)。この台状土製品は近年、粘土焼成塊や未焼成土器、粘土探掘坑などと共伴・出土する事例が増えてきたことから、土器製作用の回転台とする八幡の説が支持されてきた。中期初頭に出現し中期末に廃れるが、東北地方では一部後期に引き継がれている。

2002年12月に山梨県考古学協会が主催したシンポジウム「土器から探る縄文社会」資料集には、全国から276遺跡1569個体が集成された。茨城県下からも13遺跡39個体が出土しているが、その多くは加曽利E式期であり、阿玉台式期の事例はつくば市中台遺跡だけであったから、本遺跡の1例は貴重な追加例となった。

本遺跡の台状土製品は、復元すれば直径25cmを測るかなりの大形品である。深鉢形土器の平均的な底部径を12cmとすると、この台ではもっとずっと大形の土器まで製作することができる。そうした大形土器という

のは、家族単位で使用するというよりも大勢の仲間うちで共用するような土器であろう。このように考えると、この集落では自ら土器作りを行なうとともに、周囲の地域の土器も保有する、情報の疎通する集団社会の一員を構成していたことが想定されるのである。

本調査区における住居跡は、建替えが目立つほどもなく、貯蔵施設である袋状土坑が2基を1組とする2ないし3回構築されただけで廃村となったようである。その行方ははっきりしないが、北側丘陵の善九郎遺跡から検出されている土器（第32図）には加曾利E式古段階が含まれているので、あるいは善九郎遺跡に集落を移したのかも知れない。いまから4800年ほど前の、集落の姿を垣間見てみた。

（安孫子昭二）

## 2. 古墳群について

発掘区はわずか364㎡という狭い範囲であったが、やや不確実なものを含めて中・小4基の古墳の存在が明らかにされた。これまでに5基の円墳からなるとして周知されてきた善九郎古墳群に、あらたに追加されることになった。このことはまた、戦時中に軍隊が古墳群を削平して崩壊したと伝えられているように、周囲にも墳丘が削平された古墳が数多く存在する可能性を示唆している。

これら中・小4基の古墳は残念ながら墳丘は失われており、周溝を確認するのみであるが、近接しながらも相互に重複することはない。このことは、ここが葬域となっていたことを示すものと思われる。以下に個々の古墳を詳しくみながら、成果の一端を示しておこう。

### 古墳の規模と墳型

古墳SX-1は、周溝の全容が調査されており、実測値で規模が知られるものである。それによれば南北9.3m、東西9.4mのほぼ正門に近い周溝がまわるから、直径7～7.5mの円墳であった可能性が高い。周溝は東南方向で約3.7m幅で切れている。この部分は、本来周溝がなかったものか、巡っていたけれども掘込みが浅いために削平されてしまったのか、判断はむずかしい。仮に開口部があったとしても、もう少し幅のせまい部分であったと考えられる。

埋葬主体部は地山面に痕跡を認めないことから、横穴式石室を構えるものではなく、古墳SX-3の例にみるように、墳丘内に掘方土坑をうがって箱式石棺を構えたものであろう。

古墳SX-2は、発掘区の西側に周溝の一部長さ10mあまりが掛ったもので、大半は未調査区に残されていることになる。円墳の一部とみなすと、直径20mをこえる古墳に復原され、溝幅は2mをこえ、深さも30cmを確認している。溝は南側に向うにつれて規模を広げるため、遺存の良い状態が期待される。古墳の築造は溝内から出土した土師器片により、6世紀代に造営されたようである。周知された善九郎古墳群の中では最大規模の古墳と思われるが、埋葬施設は不明である。

古墳SX-3は、発掘区の南東端にわずかにかかった小形の古墳で、内部主体の箱式石棺とこれをとりまく周溝の一部が検出された。石棺の主軸方向で復原すると約5.5mの円形に周溝がめぐると思われる。西南部が大きく開口するが、これも削平によるものとみてよいだろう。

さて主体部の箱式石棺であるが、墳丘を失うほどの削平を受けながらも残存したのは、地山面から掘方土坑をもうけその中に構築されたためである。多くの箱式石棺は、時期を新しくするにしがって墳丘盛土内から地山面へとその位置を移していく傾向がある（註1）。この流れからすると本石棺例も、新期の様相と思われるのだが、後述するように石棺形態は必ずしも新しくはない。むしろ、超小形墳であるために盛土が高くなく、必然的に地山面に構築されることになったのが実態であろう。

石棺の規模は、長径140cm、幅75cm、深さ30~40cmの掘方に内法81cm×34cmの雲母片岩を用いた石棺を組む。その構造は、長さ75cm、幅46cmの板石を床板とし、両側石は、長さ90cm弱、幅40~50cmの板石を横長にしておき、両木口石は55~60cm大の板石でふさいでいる。つまり、この箱式石棺は、側石を横長に使うと言う特徴をもつものである。常陸の箱式石棺を分析した黒澤彰哉氏によれば、側石は横位から縦位へとその構築法を変えた型式変遷があきらかにされている。そしてこれは三昧塚古墳を初源形態として、6世紀初頭から7世紀にかけて編年づけられている(註2)。これにしたがえば本古墳の石棺は、黒澤A類、すなわち7世紀代には降らない型式石棺であると言うことができよう。この古墳周溝から出土した土師器坏は、口径13.5cmの内傾する口縁環でヘラケズリが卓越する。地域色を発する6世紀後半のものとしてよからう。

古墳SX-4は、発掘区の北端にかりうじて溝のみ長さ4mほどがかり調査された。周溝の方向から古墳は円形というよりも、方墳である可能性が高い。おそらく5m前後の方形盛土をもっていたものであろう。内部主体、遺物は不明である。この点で古墳と確実視するにやや躊躇するが、掘り込み面および周溝内覆土からはほまちがいなと考えられる。

### 古墳の時期と性格について

検出された4基の古墳の造営時期の手がかりとなるものは、きわめて少ない。この中で、SX-2・3の周溝から出土した土師器坏は有力な資料となる。第22図に示した2点のうち、1は、口縁部が強く外反する、北関東から福島南部にかけて分布する特徴的な坏である。確実に6世紀代におきまり、古墳の造営の一点を示す。2も先述のとおり地域色出現の6世紀後半のものと考えてよく、造営時期がここまで降ると考えてよい。古墳SX-2の埋葬施設は不明であるものの、SX-1およびSX-3は箱式石棺を用いるものであった。SX-4もおそらく箱式石棺であろう。この場合、その形態は側石縦位使用の新期のものかも知れない。すると本古墳群が7世紀代にまで継続することになるが、現状では検討の資料情報はない。ところで古墳SX-2は20mを超える円墳であるが、横穴式石室墳の可能性もないとは言えず、その点も手がかりは乏しい。そのことを考慮に入れて、あえて本古墳群の性格に言及すれば次のようである。

もっとも注意されるのは、4基の古墳群は規模・墳形に違いがありながら、重複することなく占地していることである。そのことは、墓地として計画的に造営されたことを示唆している。方墳の規模の差は階層的な側面を示すものであり、現実にはSX-2→1→3の関係がそのことを示している。同時に、隣接する占地の仕方からは、きわめて強い親族的関係をうかがうこともできる。SX-3の石棺は長さ80cmという小規模なもので、成人の埋葬とは考え難く、小人用とすればますますその感を強くする。

(服部敬史)

- 註1 阿久津久・片平雅俊 「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』  
第44集 1992
- 註2 黒澤彰哉 「常陸地域における群集墳の一考察」『婆良岐考古』 第15号 1993



## 引用参考文献

- 八幡 一郎 1965「縄文土器・土偶」『陶器全集』29 平凡社
- 水野 正好 1969「縄文時代集落の研究への基礎的操作」『古代文化』21-3 古代学協会
- 西村 正衛 1972「阿玉台式土器編年的研究の概要」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』18
- 大塚初重他 1974「茨城県史料 考古資料編 古墳時代」茨城県史編さん原始古代史部会
- 川崎純徳他 1979「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」茨城県史編さん原始古代史部会
- 山内 清男 1979「日本先史土器の縄紋」
- 鈴木裕芳他 1980「諏訪遺跡発掘調査報告書」日立市教育委員会
- 海老沢 稔 1984「茨城県内における縄文中期前半の土器様相(2)」『婆良岐考古』6
- 海老原郁雄 1988「北関東加曾利E式土器様式」『縄文土器大観 3』
- 塚本 師也 1989「北関東における阿玉台式土器の様相」『第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題』  
群馬県考古学研究所
- 友部町史編さん委員会 1990「友部町史」友部町
- 安久津久・片平雅俊 1992「常陸の後期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』44
- 大関 武 1993「筑波地域における古墳文化の展開(1)」『婆良岐考古』15 婆良岐考古同人会
- 黒沢 彰哉 1993「常総地域における群集墳の一考察」『婆良岐考古』15 婆良岐考古同人会
- 黒沢 秀雄 1994「茨城県の縄文時代中期のフラスコ状土坑について」『研究ノート』3 茨城県教育財団  
縄文時代研究班 1995「茨城県における縄文時代中期前半の住宅跡形態について」『研究ノート』4  
茨城県教育財団
- 縄文時代研究班 1996「関東地方における縄文時代中期の「有段式堅穴遺構」について」  
『研究ノート』5 茨城県教育財団
- 谷井 彪 1996「勝坂式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 細田 勝 1996「阿玉台式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 安孫子昭二 1997「縄文中期集落の景観—多摩ニュータウンNo.446遺跡」『東京都埋蔵文化財センター研究論  
集』16 東京都埋蔵文化財センター
- 吹野富美夫 1998「前田村遺跡G・H・I区における縄文時代中期中葉の上器様相」『研究ノート』8  
茨城県教育財団
- 塚本 師也 2000「茨城県における縄文時代中期中葉の上器について」『常総古地』15
- 吹野富美夫、他 2002「宮後遺跡1」茨城県教育財団
- 山梨県考古学協会 2002「土器から探る縄文社会 2002年度研究集会資料集」
- 海老原郁雄 2003「縄文集落と土坑域の形成」『栃木の考古学』
- 服部 敬史 2004「茨城県友部町小原遺跡」大成エンジニアリング株式会社

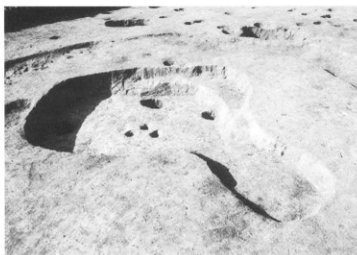
# 写真図版



1. 遺構プラン検出状況 (南から)



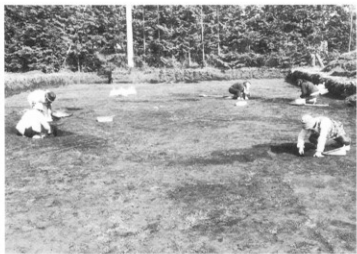
2. JSI-1 東西土層断面 (南から)



3. JSI-1 完掘状況 (南から)



4. 調査風景



5. 調査風景



1. JSI-2 完掘状況 (南から)



2. JSI-2 東西土層断面 (南から)



3. JSI-2 遺物出土状況 (南から)



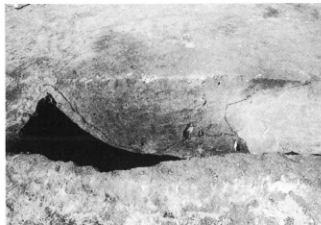
4. JSK-1 完掘状況 (西から)



5. JSK-1 上層断面 (西から)



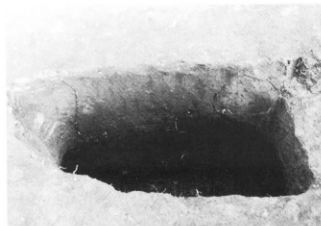
1. JSK-2 完掘状況 (西から)



2. JSK-2 土層断面 (西から)



3. JSK-3 完掘状況 (南から)



4. JSK-3 土層断面 (南から)



5. JSK-4 完掘状況 (南から)



6. JSK-4 土層断面 (南から)



7. JSK-5 完掘状況 (南から)



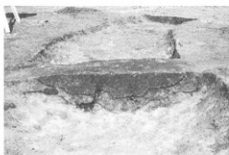
8. JSK-5 土層断面 (南から)



1. JSI-1・SX-1完掘状況 (南から)



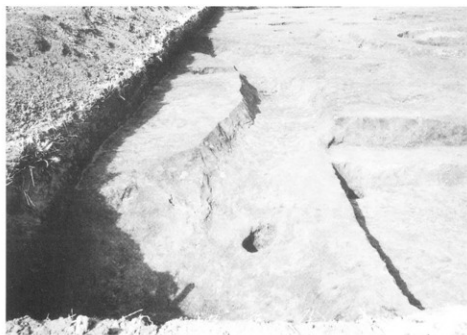
2. SX-1 土層断面A-A' (東から)



3. SX-1 土層断面B-B' (東から)



4. SX-1 土層断面C-C' (西から)



5. SX-2 完掘状況 (南から)



6. SX-2 土層断面A-A' (東から)



7. SX-2 土層断面B-B' (南から)



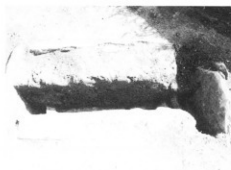
1. SX-3 完掘状況 (南から)



2. SX-3 完掘状況 (南西から)



3. SX-3 検出状況 (南から)



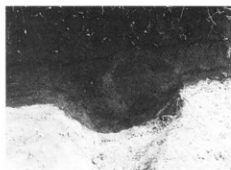
4. SX-3 土層断面 (南西から)



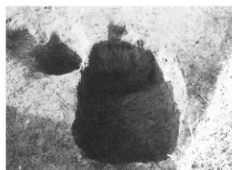
5. 調査風景



6. SX-3 土層断面B-B' (西から)



7. SX-3 土層断面A-A' (西から)



8. SX-3 掘方完掘状況 (南から)



9. SS-1 検出状況 (北から)



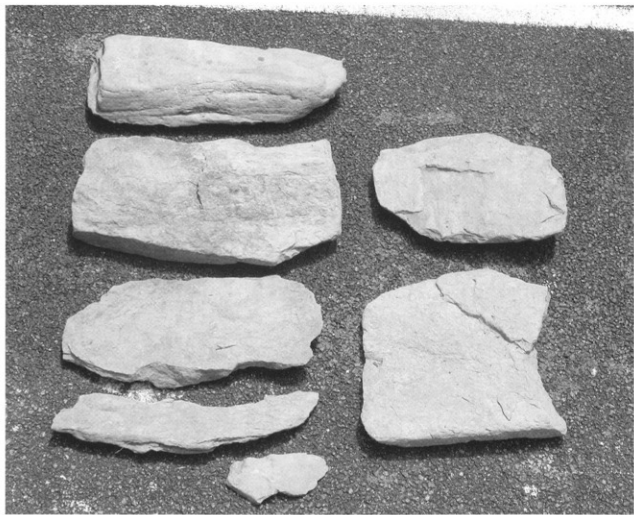
10. SX-4 完掘状況 (南から)



11. SX-4 南北土層断面 (西から)



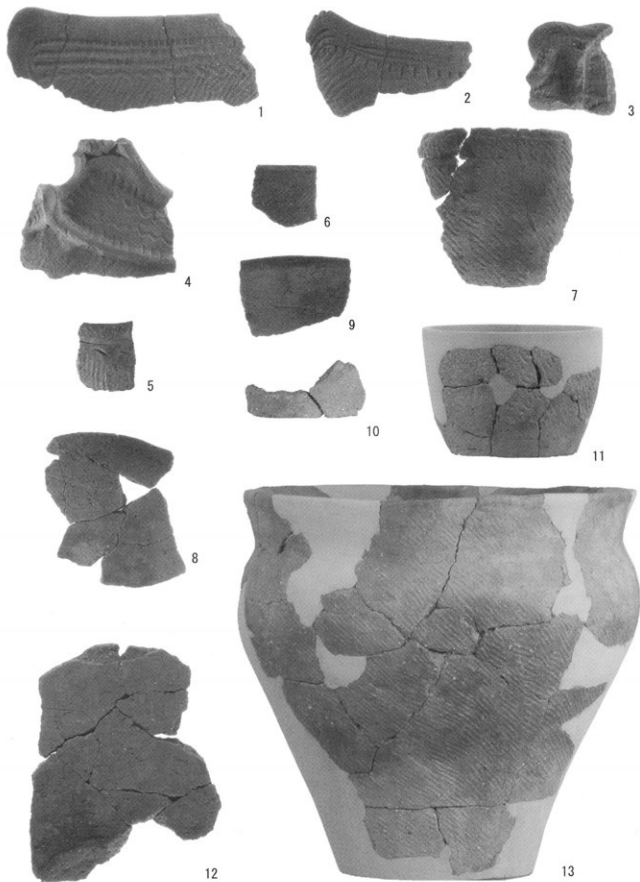
1. SX-3 石棺完掘状况



2. SX-3 石棺解体状况



JS1-1



JS1-1 出土土器

JSI-2



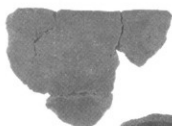
JSI-2 出土土器(1)

JSI-2

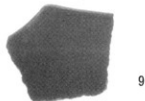


JSI-2 出土土器(2)

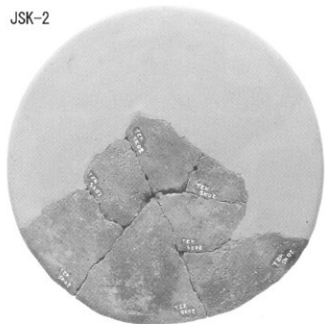
JSK-1



JSK-2



JSK-2



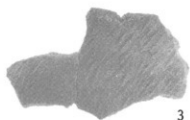
1



JSK-3



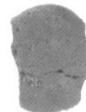
2



3



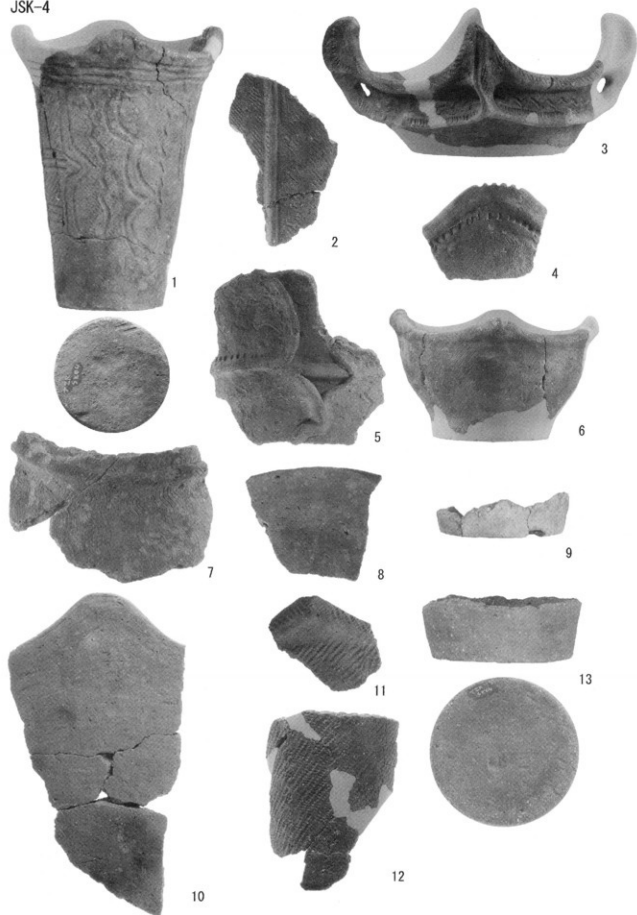
4



5

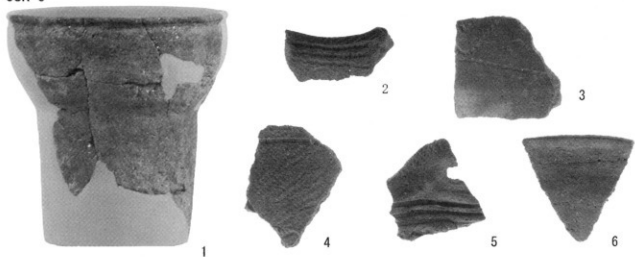
JSK-2·3 出土土器

JSK-4

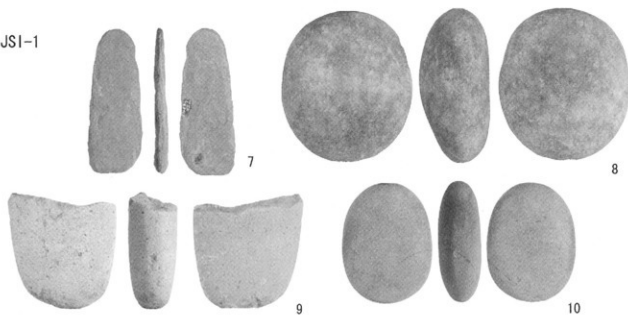


JSK-4 出土土器

JSK-5



JSI-1



JSI-2



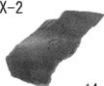
JSK-3



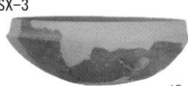
SX-1



SX-2



SX-3



## 報告書抄録

ふりがな	ぜんくろうこふんぐん							
書名	善九郎古墳群							
副書名	「穴戸ヒルズカントリークラブ道路工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	安孫子昭二 服部敬史 伊藤俊治 小野真美							
編集機関	大成エンジニアリング株式会社 埋蔵文化財調査部							
所在地	〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 日本生命早稲田ビル8F							
発行年月日	2004年(平成16年)5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
善九郎古墳群	茨城県西茨城郡 友部町南小泉 1535番外	8321	57	36度 19分 28秒	140度 16分 44秒	2004年 2月16日 ～ 2004年 2月27日	400㎡	「穴戸ヒルズカントリークラブ道路工事」に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構	主な遺物			特記事項	
善九郎古墳群	集落・古墳	縄文	住居 2軒 古墳 5基	縄文土器・土師器				
		古墳	古墳 4基 磯群 1基					

茨城県友部町

### 善九郎古墳群

-「穴戸ヒルズカントリークラブ道路工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

平成16年5月31日

編集 大成エンジニアリング株式会社  
〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1  
日本生命早稲田ビル8F  
電話 03-5285-3155

発行 株式会社 穴戸国際ゴルフ倶楽部  
〒106-0032 東京都港区六本木6-2-31  
ZONE六本木ビル6階  
電話 03-3402-4410

印刷・製本 松涛印刷株式会社



